

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第45集

鶴ヶ丘 (E区)

住宅・都市整備公団川越・鶴ヶ島地区埋蔵文化財発掘調査報告

1985

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

^{つる}鶴 ^がヶ ^{おか}丘 (E区)

住宅・都市整備公団川越・鶴ヶ島地区埋蔵文化財発掘調査報告

1985

序

埼玉県西部地域は、各種開発事業が進行し、目まぐるしい発展変化をきたしております。特に、首都東京から放射線状に延びる私鉄、国鉄各線沿いは、大小の開発事業が広範な地域で、絶え間無く進行しております。

住宅・都市整備公団の川越・鶴ヶ島土地区画整理事業もその一つであります。

本地区内には8か所の埋蔵文化財包蔵地が所在しており、このうち7か所については既に発掘調査が実施され、報告書も刊行されております。残る1ヶ所についても現状保存すべく協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し記録保存を行うことになりました。

発掘調査は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が住宅・都市整備公団から受託し、引き続き報告書作成事業を実施いたしました。

本書は、川越・鶴ヶ島土地区画整理事業地内の鶴ヶ丘遺跡区に関する報告書であります。この報告書が広く学術研究、教育等に活用され、今後の埋蔵文化財保護に資するところとなれば幸いです。



末尾ながら、発掘調査、整理にあたり多大の御支援、御協力を賜りました住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、同埼玉西宅地開発事業所、鶴ヶ島町教育委員会、川越市教育委員会ならびに地元関係者の方々に深く感謝いたします。

昭和60年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

例 言

1. 本書は住宅・都市整備公団川越・鶴ヶ島土地地区画整理事業にかかる埼玉県入間郡鶴ヶ島町大字鶴ヶ丘富士見台に所在する鶴ヶ丘遺跡E区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課の調整を経て、住宅・都市整備公団の委託により財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が58年12月1日より昭和59年6月30日にかけて実施した。整理、報告書作成作業も引き続き財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和59年7月1日より60年3月31日にわたり実施した。
3. 出土品の整理及び図の作成は岩瀬譲、酒井和子が主にあたり藤原高志、黒坂慎二の協力を得た。
4. 発掘調査における写真は藤原、岩瀬、黒坂が、遺物写真は岩瀬が撮影した。
5. 本書の執筆は、岩瀬以外の箇所についてはその執筆分担を明記した。
6. 遺跡基準点は国土地理院3等三角点、大塚野より取り付け、水準は埼玉県地盤沈下調査埋設の埵48—04水準点より取り付けた。(基準点1は $X=-8,524,337$ 、 $Y=-37,073,774$ 、 $H=34,468\text{m}$)
7. 出土土器の胎土分析は第四紀研究所の井上巖氏に委託した。
8. 住居跡実測図中の  は焼土、土器実測図中の  は朱彩を表わす。
9. 本書の土層断面図における土壌の色、遺物観察表における土器等の色の表示は「新版標準土色帖」(農林省農林水産技術会議事務局監修)に基づいた。
10. 古墳の名称は、昭和37年に発掘調査された際の「鶴ヶ丘稲荷神社古墳」を使用した。
11. 本書の編集は調査研究第四課職員があたり、中島利治が監修した。
12. 本書を作成するにあたり、下記の方々から御教示、御助力を賜った。(敬称略)

齋 藤 稔 堀 口 万 吉 増 田 逸 朗 宮 崎 朝 雄

目 次

序	
例 言	
I 調査の概要	1
1. 発掘調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	3
II 遺跡の立地と環境	5
III 遺跡の概観と調査の方法	8
IV 遺構と出土遺物	13
1. 先土器時代の遺構と遺物	13
2. 古墳時代の遺構と遺物	38
(1) 住居跡	38
(2) 鶴ヶ丘稻荷神社古墳	46
(3) 土塚・溝状遺構	56
3. グリッド出土遺物	58
(1) 縄文式土器	58
(2) 古墳時代以降の土器	60
(3) グリッド出土石器	64
V 出土遺物の胎土分析	67
VI 結 語	77

挿 図 目 次

<p>第1図 周辺の主な遺跡……………6</p> <p>第2図 遺跡位置図……………9</p> <p>第3図 先土器時代全測図……………13</p> <p>第4図 石器・礫分布図……………14</p> <p>第5図 標準土層図……………16</p> <p>第6図 集中区A……………17</p> <p>第7図 集中区B……………20</p> <p>第8図 集中区B出土石器……………21</p> <p>第9図 集中区B出土石器接合例(1)……………22</p> <p>第10図 集中区B出土石器接合例(2)……………23</p> <p>第11図 集中区C……………25</p> <p>第12図 集中区C出土石器(1)……………27</p> <p>第13図 集中区C出土石器(2)……………28</p> <p>第14図 集中区D……………29</p> <p>第15図 グリッド出土先土器時代石器……………31</p> <p>第16図 グリッド出土先土器時代石器接合例 ……………32</p> <p>第17図 古墳時代全測図……………38</p> <p>第18図 第1号住居跡実測図……………39</p> <p>第19図 第1号住居跡出土遺物……………40</p> <p>第20図 第2号住居跡実測図……………41</p> <p>第21図 第2号住居跡出土遺物……………42</p> <p>第22図 第3号住居跡実測図……………43</p> <p>第23図 第3号住居跡出土遺物……………44</p> <p>第24図 鶴ヶ丘稲荷神社古墳全測図……………46</p>	<p>第25図 鶴ヶ丘稲荷神社古墳実測図……………47</p> <p>第26図 鶴ヶ丘稲荷神社古墳墳丘周堀断面図 ……………49</p> <p>第27図 鶴ヶ丘稲荷神社古墳石室実測図 ……………52</p> <p>第28図 鶴ヶ丘稲荷神社古墳石室掘り方 実測図……………54</p> <p>第29図 古墳周堀出土遺物……………56</p> <p>第30図 土墳実測図……………56</p> <p>第31図 溝状遺構実測図……………57</p> <p>第32図 グリッド出土遺物(1)……………58</p> <p>第33図 グリッド出土遺物(2)……………59</p> <p>第34図 グリッド出土遺物(3)……………61</p> <p>第35図 古墳墳丘下出土遺物……………61</p> <p>第36図 グリッド出土石器……………65</p> <p>第37図 古銭拓影図……………66</p> <p>第38図 三角ダイヤグラム位置図……………70</p> <p>第39図 菱形ダイヤグラム位置図……………70</p> <p>第40図 Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム……………70</p> <p>第41図 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグ ラム……………70</p> <p>第42図 Q-T-P-L 相関図……………73</p> <p>第43図 X線回折分析(T-1・2・6)……………75</p> <p>第44図 X線回折分析(T-7・9・10)……………76</p>
--	---

図 版 目 次

- | | | | |
|------|---------------------------------|------|----------------------------|
| 図版 1 | 遺跡全景
C B—50グリッド南壁 | 図版13 | 古墳石室（西壁）
古墳石室（東壁） |
| 図版 2 | 集中区 A
集中区 B | 図版14 | 古墳石室掘り方（東西）
古墳石室掘り方（南北） |
| 図版 3 | 集中区 C
集中区 D | 図版15 | 集中区 B 出土石器 |
| 図版 4 | 集中区 B 局部磨製礫・すり石
集中区 C ナイフ形石器 | 図版16 | 集中区 B 出土接合例
集中区 C 出土石器 |
| 図版 5 | 第 1 号住居跡
第 1 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 | 図版17 | グリッド出土先土器時代石器
グリッド出土接合例 |
| 図版 6 | 第 2 号住居跡
第 3 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 | 図版18 | 第 1・2 号住居跡出土遺物 |
| 図版 7 | 鶴ヶ丘稻荷神社古墳全景 | 図版19 | 第 3 号住居跡出土遺物 |
| 図版 8 | 鶴ヶ丘稻荷神社古墳石室前庭部 | 図版20 | 第 3 号住居跡・古墳周堀出土遺物 |
| 図版 9 | 鶴ヶ丘稻荷神社古墳石室全景 | 図版21 | 古墳周堀・古墳墳土下・グリッド出土遺物 |
| 図版10 | 古墳現況
古墳石室（奥室） | 図版22 | グリッド出土遺物 |
| 図版11 | 古墳石室西壁
古墳石室東壁 | 図版23 | グリッド出土石器
グリッド出土石器 |
| 図版12 | 古墳石室奥壁
古墳石室奥壁 | 図版24 | グリッド出土石器
グリッド出土縄文式土器 |

表 目 次

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|--------------------|
| 第 1 表 | 集中区 A 石器一覧表……………33 | 第 7 表 | 集中区 C 礫一覧表……………36 |
| 第 2 表 | 集中区 A 礫一覧表……………33 | 第 8 表 | 集中区 D 石器一覧表……………37 |
| 第 3 表 | 集中区 B 石器一覧表……………34 | 第 9 表 | 集中区 D 礫一覧表……………37 |
| 第 4 表 | 集中区 B 礫一覧表……………34 | 第10表 | グリッド出土先土器時代石器………37 |
| 第 5 表 | 集中区 C 石器一覧表(1)……………35 | 第11表 | 胎土性状表……………68 |
| 第 6 表 | 集中区 C 石器一覧表(2)……………35 | 第12表 | 分析試料一覧……………68 |

I 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

日本住宅公団（現、住宅・都市整備公団）首都圏開発本部が、川越市及び鶴ヶ島町138haにわたって宅地開発する川越・鶴ヶ島地区は区画整理方式により、造成事業を推進しようとするものである。

昭和45年2月20日、日本住宅公団首都圏開発本部開発本部長は、埼玉県教育委員会に「住宅地区開発予定地（川越・鶴ヶ島地区）内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて」の照会があった。これを受けた県教育局社会教育課文化財係（現、文化財保護課）は、昭和36年度に調査した埋蔵文化財包蔵地台帳と開発区域を照合し、その上で改めて分布調査を実施した。その結果、土器片散布地14地点、古墳跡2地点を公団に示した。その後、埋蔵文化財包蔵地の詳細な確認調査がおこなわれ、8地区が再確認された。これらの地区を総称して「鶴ヶ丘遺跡」とした。

鶴ヶ丘遺跡	所在地	種別	時代	状況	備考
A 区	川越市大字笠幡字下丹草825-1ほか 鶴ヶ島町大字鶴ヶ丘字富士見台209-1ほか	集落跡	古墳	畑	開越道用地
B 区	川越市大字笠幡字中丹草1749ほか	集落跡	古墳	畑	
C 区	川越市大字笠幡字下丹草5057ほか	集落跡	古墳	畑	
D 区	川越市大字笠幡字石川772ほか	集落跡	古墳	畑	
E 区	鶴ヶ島町大字鶴ヶ丘字富士見台241ほか	円墳	古墳	畑	
F 区	川越市大字鯉井新田字上郷122ほか	集落跡	古墳	畑	
G 区	川越市大字鯉井新田字上郷106ほか	集落跡	縄文・古墳	畑	
H 区	鶴ヶ島町大字鶴ヶ丘字富士見台225ほか	円墳	古墳	畑	

このうち、A区は開越自動車道関係で、昭和46、47年度に県教育委員会直営による発掘調査が実施された。また、未買収地であったE区を除くB～H区は、昭和48、49年度に県教育委員会直営による発掘調査が実施され、昭和50年度に報告書が刊行された。

E区は、その後に土地の買収問題が解決され、住宅・都市整備公団の依頼により改めて発掘調査が実施されることとなった。この時、文化財保護課は県教育委員会としての発掘調査は終了しているとし、鶴ヶ島町教育委員会に対し、発掘調査を実施する旨を示した。そして町教育委員会、公団、文化財保護課の三者による協議がおこなわれた。しかしこの協議で町教育委員会から、期間、人員の関係で発掘調査の実施は困難であるとの回答が示された。その結果、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に対し、発掘調査の実施の依頼がおこなわれ、事業団、町教育委員会、公団、文化財保護課の四者による協議がおこなわれた。その結果、発掘調査は事業団が実施することとなり、昭和58年12月1日から開始された。

文化庁からは、昭和56年2月27日付け委保第5の89号により埋蔵文化財発掘調査届に対する通知があった。

発掘調査の組織

1. 発掘（昭和58年度）

主体者（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

副理事長 岩上進

常務理事 石川正美

庶務経理（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長 佐野長二

関野栄一

江田和美

岡野美智子

福田浩

本庄朗人

発掘（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長

調査研究副部長

調査研究第二課長

横川好富

小川良祐

小久保徹

藤原高志

黒坂禎二

2. 発掘及び整理（昭和59年度）

主体者（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

副理事長 岩上進

常務理事 石川正美

庶務経理（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長 小宮秀男

関野栄一

江田和美

岡野美智子

福田浩

本庄朗人

発掘整理（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長（兼）調査研究第二課長

調査研究副部長

調査研究第四課長

中島利治

小川良祐

高橋一夫

藤原高志

岩瀬譲

3. 協力者

鶴ヶ島町教育委員会 川越市教育委員会及び地元住民

2. 調査の経過

鶴ヶ丘遺跡E区の調査は、昭和58年12月1日から昭和59年6月30日までのほぼ8ヶ月間にわたって実施された。当初調査対象面積は約4500㎡であったが、調査を進めていくにしたがい西へ大きく広がった。調査対象地域は、東半部にある古墳墳頂部に稲荷神社の祠が祭られており、開墾と耕作がおこなわれ、西半地域はその大半が茶畑に利用されていた。以下調査の進行を月毎に記していくが1月から2月にかけて降雪による作業中断が何度もあり困難を極めた。

12月 調査地域内を北東部から西南部へと貫く予定の幅16mの道路部分より、重機による表土の除去を開始し、順次、遺構確認に入る。同時に古墳墳頂部の測量をおこなう。

道路部分より古墳周堀と思われる落ち込みを検出した。墳丘部は測量終了後、表土の除去をおこない、墳頂部の攪乱部分より内部主体の検出をおこなった。その結果、内部主体は凝灰岩の切石を使用した羽子板状の横穴石室であった。

1月 墳丘周辺の表土を重機によって除去し、周堀の確認をおこない、覆土の排除を開始した。周堀と思われていた一部より住居跡（1号住居跡）を検出、墳丘部には8本のトレンチを設定し、北側のトレンチより掘り始める。同時に、石室内に落ち込んでいる側壁と思われる凝灰岩等を実測し、取り上げた。

2月 1号住居跡の実測写真撮影終了。周堀の確認、覆土排除を引き続きおこない、同時に墳丘の削平を開始し、旧表土と思われる黒褐色土まで下げる。石室内の精査をおこない、棺床面及び奥壁、側壁の実測を開始する。

石室内からは10数本の鉄片が出土したが、土器は縄文式土器片等であり、古墳に直接結びつくと考えられる土器はほとんどなかった。周堀の覆土内より先土器時代と思われる石器が出土し、同時遺構の存在を思わせる。

3月 墳丘は石室、前庭部周辺を残し、削平をおこない、2・3号住居跡を検出する。石室の実測が終了後、フォトバルーンによる上空からの写真撮影をおこない、奥壁・側壁を取り除く。引き続き石室掘り方の掘り下げを開始する。周堀の覆土排除、実測はほぼ終了するが、周堀は現在の調査区外へ延びることを確認。2・3号住居跡は調査を終了する。先土器時代遺構検出のためのトレンチ掘り下げを開始する。

4月 石室掘り方の実測をおこない、古墳全体をローム面まで削平する。先土器時代確認トレンチより石器・礫が検出する（集中区A・B・C）。

調査区域を西側へ拡張し、遺構確認をおこない古墳周堀、溝状遺構を検出。また、ローム面より

先土器時代の遺物が検出されたため、拡張区全域にわたって先土器時代確認トレンチを設定。

5月 古墳周堀の調査を終了し、古墳全体の調査を終了する。A・Bの遺物実測・写真撮影・取り上げが終了、集中区Cに着手する。拡張区の先土器時代確認トレンチより石器が出土する（集中区D）。

6月 集中区Cの調査が終了し、集中区Dに入り、月末に終了する。同時に溝状遺構の調査が終了する。

ローム下標準土層図作成のため、重機によってトレンチを設定する。土層図作成用トレンチの埋め戻し作業をおこない、器材の整備、撤収を完了し、すべての調査を終了する。

II 遺跡の立地と環境

鶴ヶ丘遺跡E区は入間郡鶴ヶ島町大字鶴ヶ丘字富士見台241番地他に所在する。鶴ヶ丘遺跡の詳細は後述するが、その範囲は広く、川越市、鶴ヶ島町にまたがり、A～H区に分けられている。E区は東武東上線鶴ヶ島駅の南南東約1.3kmに位置する。

鶴ヶ丘遺跡は、入間台地の南縁辺にあたり、南側を入間川の支流である小畔川が流れ、北側を更に小さな谷にはさまれた幅約1～1.5kmの、舌状に北東に延びる洪積台地の南側縁辺の平坦地に位置している。標高32～35mで、沖積地との比高は10m前後である。地形的区分によると、小畔川沖積地に連続する小支谷に臨む地区(A・B区)。その小支谷と小畔川沖積地の両者に臨む地区(C区)。小畔川沖積地に直面する地区(D・E・H及びF・G区)に分かれている。

鶴ヶ丘遺跡の所在する川越市、鶴ヶ島町は遺跡の豊富な地区である。しかし、先土器時代の遺跡は極めて少なくわずかに川越市登戸遺跡、鶴ヶ島町若葉台遺跡A地点、鶴ヶ丘遺跡C区からの出土(表採を含む)が知られる程度である。現在当事業団によって発掘調査が進められている川越市御伊勢原遺跡からは、遺跡範囲確認調査の段階で、先土器時代のユニットが検出されている。

縄文時代にはいと遺跡は増加してくる。早期の遺跡では、鶴ヶ丘遺跡C区、F・G区、鶴ヶ島町雷電池東遺跡、川越市上組遺跡等において、撚糸文系、条痕文系の土器が多数出土している。中期以降には、鶴ヶ島遺跡F・G区、鶴ヶ島町山田遺跡、川越市登戸遺跡、東洋大学工学部敷地内遺跡等が知られる。

弥生時代では、鶴ヶ丘遺跡C区、F・G区、川越市登戸遺跡、霞ヶ関遺跡において住居跡、方形周溝墓が調査されている。特に霞ヶ関遺跡では、弥生時代中期後葉から後期の住居跡群、方形周溝墓群が検出され、吉ヶ谷式土器のすぐれた資料を提供している。

古墳時代前期には、鶴ヶ島町脚折山田遺跡、川越市女堀遺跡、霞ヶ関遺跡、登戸遺跡等から住居跡、方形周溝墓が検出されている。女堀遺跡、霞ヶ関遺跡、御伊勢原遺跡(前出)、鶴ヶ丘遺跡は入間川、小畔川流域の近接した地区に所在し、この時期の土器を出土している。

古墳時代後期には、鶴ヶ丘遺跡F・G区、霞ヶ関遺跡、上組遺跡等が知られる。上組遺跡は、定期的に2グループの住居跡が調査され、土錘、砥石、土製支脚等が検出されている。また、昭和58年に上組遺跡隣接地を当事業団が遺跡範囲確認調査をおこない、縄文時代後期、古墳時代後期の住居跡が確認されている。

入間地方には、川越市内に、当地最古とされる三変稲荷古墳、その周辺の仙波古墳群、坂戸市に雷電塚古墳、摩利支天塚古墳をはじめとする入西(善能寺)古墳群、毛呂山町に苦林古墳等多数の古墳・古墳群が所在する。

鶴ヶ丘遺跡の周辺にも古墳群が多く所在するが削平、耕作等によって消滅してしまったものも少なくない。鶴ヶ島町においての古墳の調査はあまり進んでおらず、鶴ヶ丘古墳群、脚折古墳群が知られる程度である。一方、川越市においては多くの古墳・古墳群が確認され調査もおこなわれている。小畔川流域では、小堤山神古墳、西原古墳をはじめとする下小坂古墳群、西原古墳の東方約



- A~H 鶴ヶ丘遺跡A~H区 1 和模場遺跡 2 坂戸山田遺跡 3 富士見遺跡 4 千代田・若葉台遺跡
 5 大塚遺跡 6 八幡原遺跡 7 山田・一天狗遺跡 8 宮田遺跡 9 北ヶ谷遺跡 10 雷電池東遺跡
 11 共栄遺跡 12 松原前遺跡 13 上谷遺跡 14 在家遺跡 15 南精進遺跡 16 東洋大学工学部敷地内遺跡
 17 どうまん塚古墳 18 登戸遺跡 19 河肥氏館跡 20 西ヶ岡遺跡 21 牛塚古墳(的場古墳群) 22 お寺
 山遺跡 23 上組遺跡 24 御伊勢原遺跡 25 女塚遺跡 26 東女塚原遺跡 27 中組遺跡 28 若宮遺跡
 29 山王塚古墳 30 南大塚古墳群 31 南大塚遺跡 32 西原古墳(下小坂古墳群)

第1図 周辺の主な遺跡

500mにあるどうまん塚古墳、東洋大学工学部敷地内の古墳群等がある。下小坂小古墳群は、群集墳としては初期的なものであり、6世紀中葉から7世紀初頭の様相を示している。

入間川流域には、牛塚古墳をはじめとする的場古墳群、山王塚古墳を中心とする南大塚古墳群等が所在する。南大塚古墳群では3基の発掘調査がおこなわれているが、7世紀後半の築造とされている。なお、鶴ヶ丘遺跡と小坪川をはさんで対岸に所在する御伊勢塚(埼玉県遺跡地図・地名表では女塚古墳)は、当事業団でおこなった周堀・版築痕確認調査の結果、塚と判定された。

奈良、平安時代の遺跡としては、鶴ヶ島町若葉台遺跡、脚折遺跡群(一天狗・山田・宮田・雷電池東)、川越市霞ヶ関遺跡、河越氏館内遺跡等がある。若葉台遺跡は、その規模や出土遺物によって、この時期を解明する上で重要な資料を提供している。

川越市、鶴ヶ島町周辺は、宅地造成による開発が進み、そのための大小の発掘調査は、現在も進められている。今後これらの調査によってより貴重な資料が数多く提供されることと思う。

参考文献

- 谷井彪・小久保敏他 1976 「鶴ヶ丘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会
田中一郎・玉利秀雄・斎藤稔他 1984 「若葉台遺跡群 A・B・B地点南」 鶴ヶ島町教育委員会 若葉台遺跡発掘調査団
玉利秀雄・斎藤稔・西川制 1981 「脚折遺跡群」 鶴ヶ島町教育委員会
小泉功 1983 「若葉台シンポジウム」 鶴ヶ島町教育委員会・若葉台遺跡発掘調査団
川越市 「川越市史」 第一巻 原始古代編 1672 川越市
埼玉県 「新編 埼玉県史」 資料編1 原始・古代 旧石器・縄文 1980
同 上 資料編2 原始・古代 弥生・古墳 1982
同 上 資料編3 古代1 奈良・平安 1984
埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要 1983
埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報 4 1984

Ⅲ 遺跡の概観と調査の方法

鶴ヶ丘遺跡は、川越市、鶴ヶ島町にまたがり、その面積は広大である。そしてその中はA～H区の遺跡が所在し、昭和47年、A区より発掘調査が開始され、その後断続的におこなわれた。ここでは、すでに調査が実施され、報告書も刊行されたものも含めてその概要を記してみたい。

A区

昭和47年、関越自動車道関係で調査。遺構は、溝1、土塹7である。溝は、断面「箱罌研」を呈し、ほぼ東西方向に走る。遺物は、縄文時代、古墳時代、平安時代末ないしは鎌倉時代初めの土器片及び鉄器が出土したが、遺構に伴うものはない。

B区以下H区までは、主に住宅・都市整備公園（以前は日本住宅公園）の宅地開発に関係する調査である。

B区

A区の南西約200m、遺跡の西端に位置し、昭和48年度に調査。遺構は、溝3、土塹58である。遺物は、1号跡（土塹）より須恵器坏の底部が出土しているのみである。

C区

A区の南東約300mに位置し、昭和49年度に調査。舌状台地の先端部に立地し、独立丘と同様な地形にある。遺構は、弥生時代後期の住居跡17、奈良時代の住居跡3、地下式竈1、溝2が検出されている。

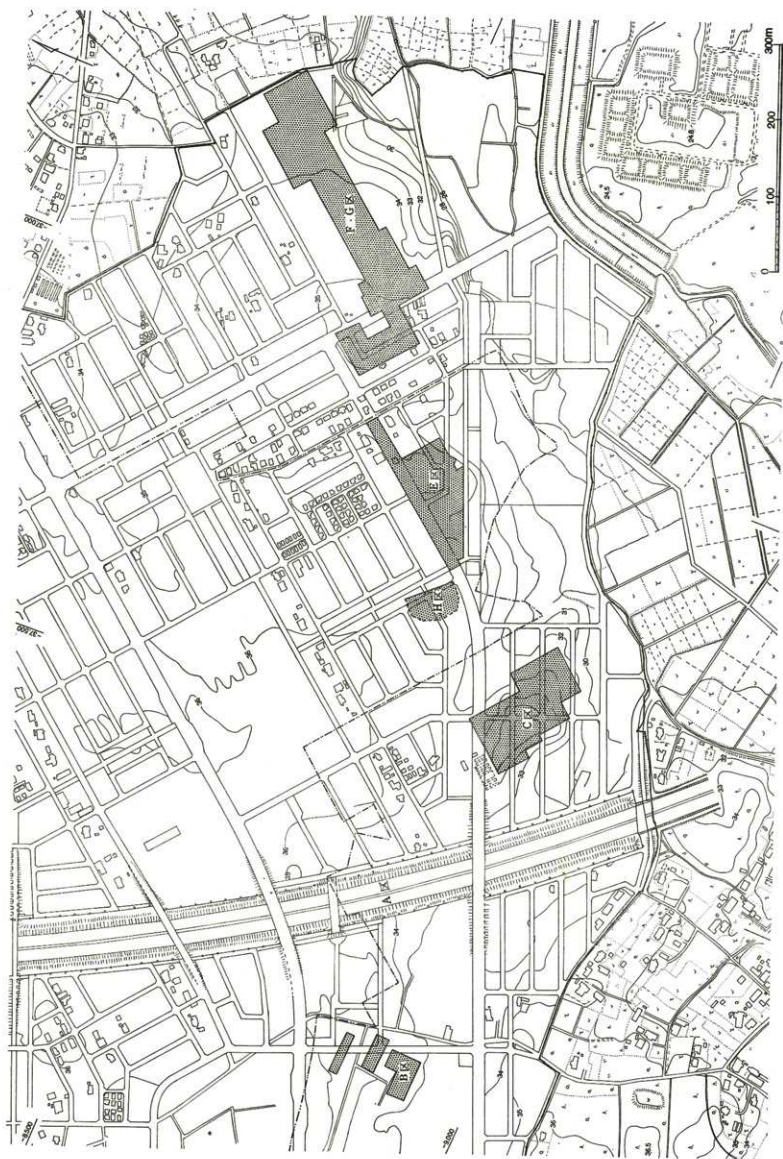
弥生時代後期の住居跡は、一辺7.6mの大型住居跡を中心とし、一定空間において他の住居跡がある。住居跡は、隅丸方形・隅丸長方形が主体をなすが、円形住居跡が1軒存在する。また、8軒の住居跡において、台状遺構が検出されている。これは、床面より若干高く、固くなりベッド状遺構より小規模なものである。遺物は、甕、台付甕、高坏等があるが、住居跡に比較してその数は非常に少ない。

奈良時代の住居跡は、いずれも小形であり、散在して検出されている。遺物は、甕、台付甕、坏須恵器坏のほか鉄器が出土しているが、その数は少ない。

C区南側において、先土器時代のユニットが1か所検出され、ナイフ形石器、石核、ブレード状剥片をはじめとする64点の石器が出土し、ユニット外からも尖頭器、ナイフ形石器等が出土している。

D区

昭和49年度に調査。H区（後述）の東南約200mの台地の麓に位置する。縄文中期の土器がわずかに散布していたのみであり、遺構は全く存在していない。



第 2 圖 遺跡位置圖

E区

H区の西約150mに位置し、今回の調査区である。ただし、本区の古墳は、昭和37年に小泉功氏によって簡単な発掘調査がおこなわれており、その際土師器の小片が1片出土したと報告されている。

今回の調査では、古墳1、古墳時代前期の住居跡3、先土器時代の遺物集中区が検出された。古墳は、開墾、耕作のための削平が著しく、墳丘の高さは2m程度しかなかったが、調査によって、凝灰岩の切岩を使用した羽子板状の横穴式石室が検出された。また、墳丘周辺を断続的に巡る周堀や、墳丘より出土した石列によって方墳であることが判明した。

古墳時代前期の住居跡は、方形を呈するものが2軒で、貯蔵穴のみのものが1軒である。遺物は高坏、甕、壺、等が出土しており、特に、貯蔵穴内より多量の土器が出土している。

先土器時代の遺物は、ナイフ形石器、振器をはじめ200点以上の石器、礫が出土しており、局部磨製礫も出土している。また、古墳盛土、周堀覆土からもナイフ形石器、振器等多数の石器が出土している。

遺構に伴わない遺物としては、墳丘盛土より縄文式土器片（早期～後期）、墳丘下より古墳時代前期の土器片が出土した。

F・G区

昭和48年度に調査され、遺跡の東端に位置し互いに隣接している。遺構は、縄文時代の土壇3、弥生時代後期の住居跡（住居跡か否か不明のものも含む）19、古墳時代の住居跡1、古墳周堀の一部2、時期不明土壇4である。

弥生時代後期の住居跡は、F区とG区との2群に分かれ、その間は約100mである。なお、C区にある同時期の住居群とは約800m離れている。F区では、一辺約7mの大形住居跡を中心とした分布を示し、C区の形態と類似している。G区は発掘区域が制限され、住居跡の分布は不明である。住居のプランは、隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈し、F区・G区それぞれに1軒の円形住居が存在する。台状遺構の典型的なものも1例のみであり、他に炉や支柱穴、貯蔵穴においてC区の住居群とは異なる特徴を示している。遺物は、壺、台付甕、高坏等が出土しているが、その数は非常に少なく、C区のものと比較すると、C区のもの総じて古い様相をもっている。

古墳時代後期の住居跡は、1軒のみであり、調査区外に集落が広がると思われる。長方形のプランを呈し、東壁にカマドをもつ。西壁には長方形の張り出し部がある。遺物は、カマド右側の貯蔵穴から金環が出土し、他に大形甕、長甕、大形甗、小形壺、坏、須恵器の平瓶が出土している。

H区

C区の北約200mに位置し、昭和48年度に調査された。鶴ヶ丘1号墳である。墳丘はほとんどなく横穴式石室の一部と「コ」の字状の周堀が検出している。

石室は、全長4m前後、玄室は奥行約2m、幅1.5mの自然石乱石積両袖型崩張りプランの横穴式石室で、主軸方位はN-11°-Wである。石室下には石室と主軸方位が全く同じで方形の掘り方

が検出されている。

周堀は、西・北・東側の三方を回り、隅が断続し、舟形状に掘り込まれている。古墳の状況は全く不明であるが、明らかに方形を意識し、方墳の形態をとっている。

遺物は、石室の礎床上から棒状鉄製品が1個出土している。

以上、鶴ヶ丘遺跡各位の概要を記したが、遺跡周辺は、鶴ヶ丘古墳群と呼ばれる古墳群であった。しかし、戦後、開墾、削平がおこなわれ、畑地や宅地となってしまうかなりの古墳が消滅してしまったと思われる。

調査は、座標軸に沿って設定した30×30mの大グリッドとその中を3×3mに区画した小グリッドに基づき進めた。グリッドの名称を示す代表杭はグリッドの北西杭とした。グリッドの名称は、アルファベット（西→東）、数字（北→南）を組み合わせて使用し、各々の第1字目は大グリッドを表わし、第2字目は小グリッドを表わす。ただし、調査途中で調査区域が西側へ大きく広がったため大グリッドAの西側はZより逆行させた。遺跡内の基本杭、CA-50の座標はX=-8620,000、Y=-37100,000である。

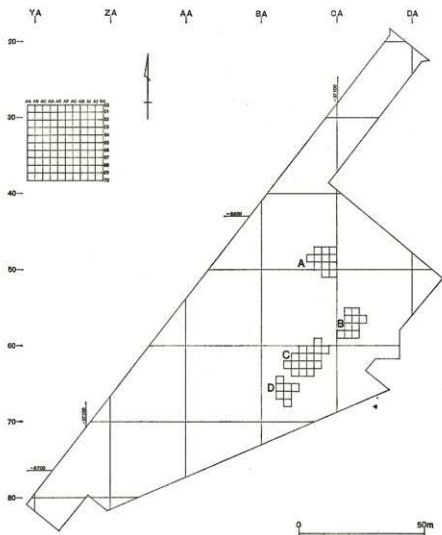
参考文献

- 横川好富 今泉泰他 1974 「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
- 谷井彪 小久保徹他 1976 「鶴ヶ丘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会

IV 遺構と出土遺物

1. 先土器時代の遺構と遺物

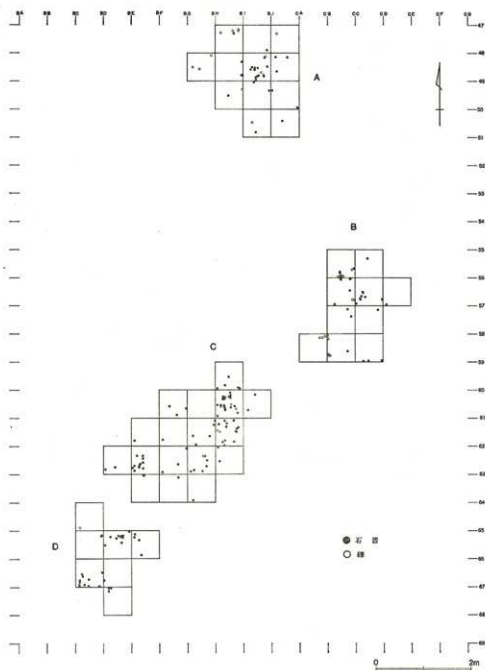
本遺跡において、当初先土器時代の存在は知られていなかった。遺構確認時におけるローム面直上や、古墳周堀の覆土より多数の石器類が出土し、その存在が明らかになった。そして、ローム直上から石器が多量に出土した遺跡東半部には9×9mに、石器の出土がほとんどなかった西半部には12×12mに1グリッド(3×3m)の割合で試掘トレンチを設け、石器が出土するとグリッド単



第3図 先土器時代全測図

位で拡張していった。その結果4所の遺物集中区が検出され、便宜的に集中区A～Dとした。

(第4図)



第4図 石器・縄分布図

層位は、第5図に示した通りであり、基本的には変化がないが、若干の差異がみられる。各層位は次のとおりである。

- 第Ⅰ層 黒褐色土層 (Hue 7.5Y R^{3/2}) ローム粒子を多量に含む。
- 第Ⅱ層 褐色土層 (Hue 7.5Y R^{1/4}) いわゆるソフトロームに相当する。しまりは良好である。
- 第Ⅲ層 褐色土層 (Hue 7.5Y R^{1/6}) 白色微粒子を多量に含む。しまりは極めて良好。立川ローム層の第二黒色帯上層と考えられる。
- 第Ⅳ層 暗色土層 (Hue 7.5Y R^{3/4}) 白色微粒子、赤色粒子(1~2m)をわずかに含む。しまりは極めて良好。立川ローム層の第二黒色帯下層と考えられる。
- 第Ⅴ層 褐色土層 (Hue 7.5Y R^{1/4}) 白色微粒子はほとんど含まず、赤色粒子をわずかに含む。しまりは極めて良好。
- 第Ⅵ層 褐色土層 (Hue 7.5Y R^{1/6}) 第Ⅴ層よりやや暗い色調で、しまりは極めて良好。
- 第Ⅶ層 褐色土層 (Hue 7.5Y R^{1/4}) 第Ⅵ層よりやや暗い色調で、しまりは極めて良好。
- 第Ⅷ層 褐色土層 (Hue 7.5Y R^{1/6}) 砂質に富み、水分を多く含む。赤色粒子を少量含み、しまりは極めて良好。

第Ⅷ層 青灰色・赤褐色粘土層

第Ⅸ層 青灰色粘土層

第Ⅹ層 礫層

遺物は、そのほとんどが第Ⅰ層あるいは第Ⅱ層より出土し、ごくわずかに第Ⅲ層出土のものもあるが、第Ⅳ層以下からは全く出土していない。以下、A~Cの各々について記す。

集中区A (第9図)

B I-48グリッドを中心として広がり、ローム上面の標高は、34.5m前後である。石器、礫の総数は41点であり、その内訳は次のとおりで、製品はない。

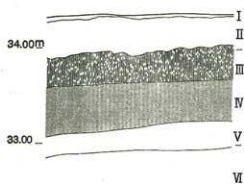
剥片・小剥片	28
礫	13

また、石質別の内訳は次のとおりである。

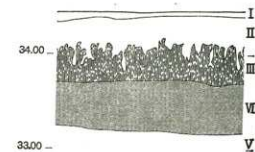
黒曜石	11
砂岩	13 (礫が4)
粘板岩	5
チャート	11 (礫が9)
メノウ	1

集中区B (第7図)

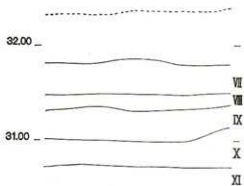
C C-56グリッドを中心として広がり、ローム上面は34.7m前後である。石器・礫の総数は45点である。内訳は次のとおりで、剥片の接合資料が2例ある。



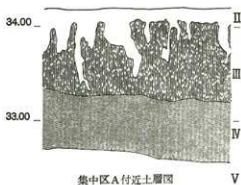
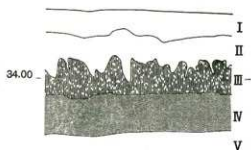
集中区B附近土层图



集中区C附近土层图



集中区A附近土层图

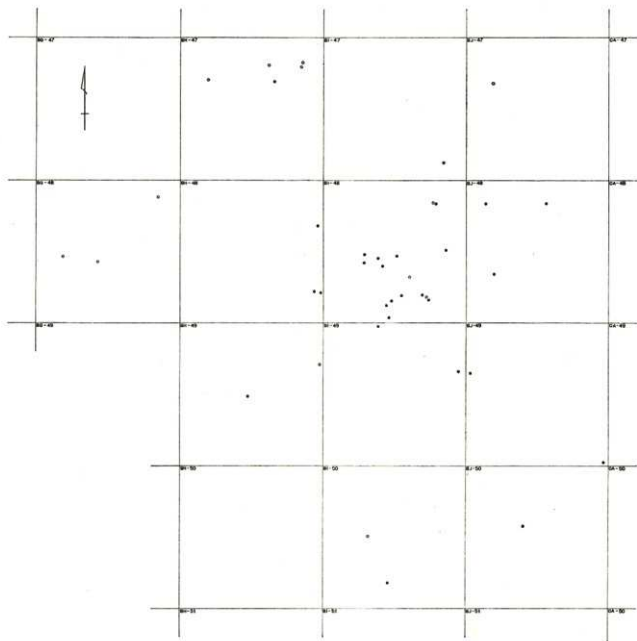


- I 黑褐色土 (Hue 7.5Y R^{3/2})
- II 褐色土 (Hue 7.5Y R^{4/2})
- III 褐色土 (Hue 7.5Y R^{4/2})
- IV 暗褐色土 (Hue 7.5Y R^{3/2})

- V 褐色土 (Hue 7.5YY^{4/2})
- VI 褐色土 (Hue 7.5Y R^{4/2})
- VII 褐色土 (Hue 7.5Y R^{4/2})
- VIII 褐色土 (Hue 7.5Y R^{4/2})
- IX 褐色土 (Hue 7.5Y R^{4/2})

- X 青灰色·赤褐色粘土层
- XI 青灰色·粘土层
- XII 砂质

第5图 标准土层图



凡 例

- ▲ ナイフ砂石部
- △ 崖 部
- 崖脚部のある割石
- 石 柱
- 高塚跡
- ナリ石
- 割 片
- 崖

第6図 集中区A

局部磨製礫	1
すり石	1
石核	1
剥片・小剥片	22
礫	20

石質による内訳は次のとおりである。

砂岩	23 (礫が17)
粘板岩	14 (礫が1)
チャート	5 (礫が1)
石英	1
凝灰岩	2 (礫が1)

局部磨製礫 (第8図24)

C B-56グリッド第I層より出土、扁平な砂岩を使用し、不整楕円形で、下端部に研磨面がある。研磨面は、表裏両面から研磨されており、他の剥離痕はみられない。なお、実測図の研磨面には擦痕線の方向が示してあるが、これは単に研磨面を示したものであり、実際の研磨の方向は不明である。

すり石 (第8図25)

C B-56グリッドより出土、凝灰岩製である。すり面を下にし、局部磨製礫と隣接して出土した。断面は三角形、すり面は不整楕円形を呈している。下端部において、すり面に対してほぼ直角な面があり弱い稜をもつ。すり面には線状のキズ痕がある。

接合資料

接合例1 (第9図)

№13はC C-56グリッドより出土し、№44はC B-60グリッド出土の剥片である。ともに二次的な加工痕はみられず、同一方向から打撃によって剥離されている。

接合例2 (第10図)

№23はC B-57グリッドより出土、№45は古墳周堀の覆土より出土した。ともに二次的な加工痕はみられない。互いに反対方向からの打撃によって剥離されている。

礫はC B-55、C B-58グリッドを中心にやや散在して出土しており、赤化やススが付着したものが多く、礫の接合関係は、個体ごとには図示しえなかったが、以下のとおりである。

№30-39

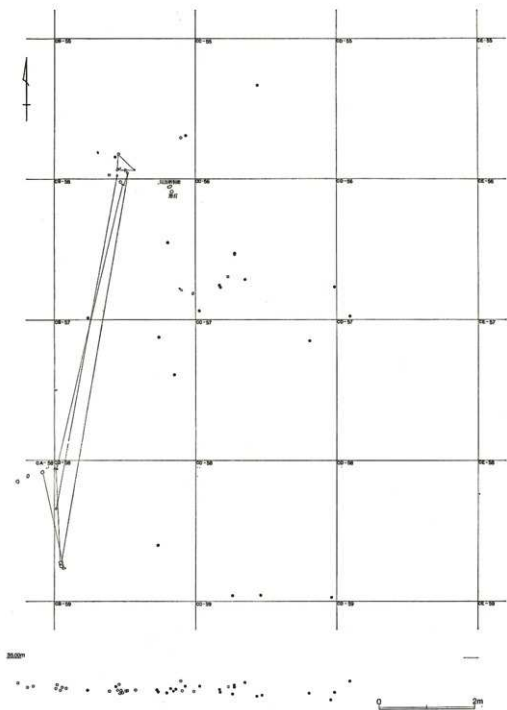
№38-48

№1-26-27-29

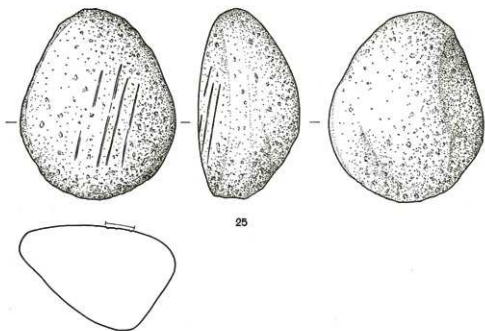
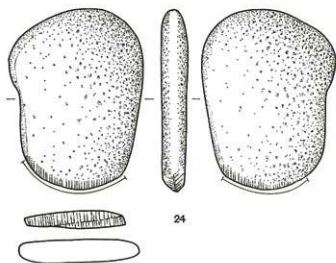
№28-33-40-41

集中区C (第11図)

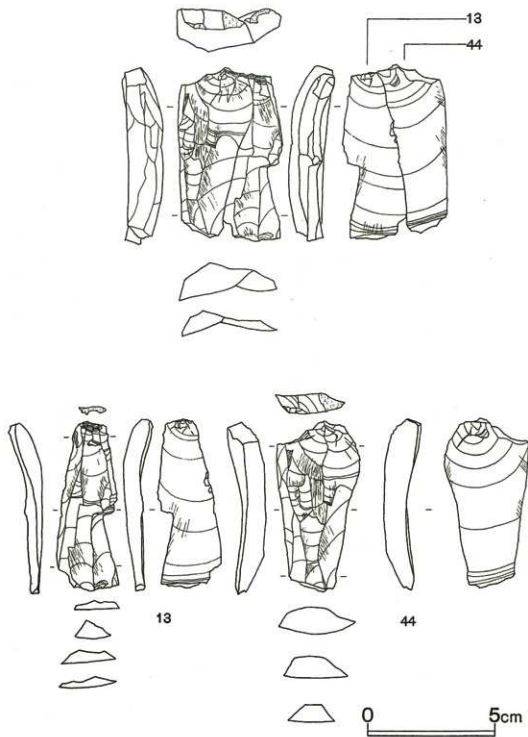
B H-61グリッドを中心として広がり、ローム上面は34.2m前後である。石器・礫の総数は82点



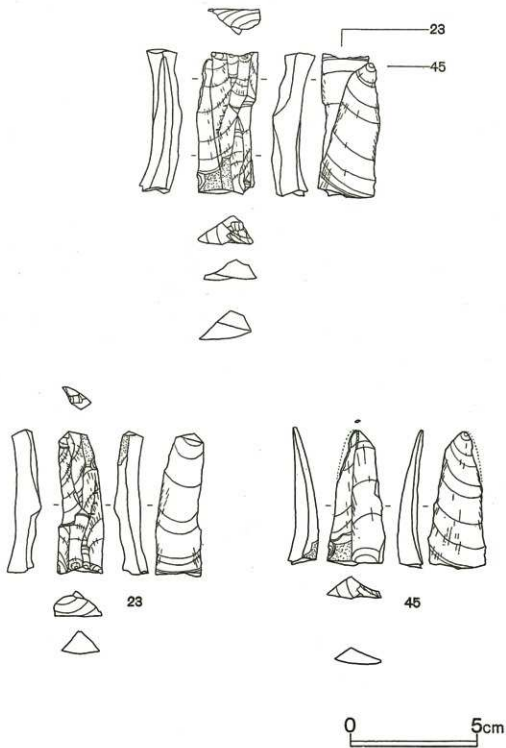
第7图 集中区 B



第8图 集中区B出土石器



第9圖 集中区B出土石器接合例(1)



第10图 集中区B出土石器组合例(2)

であり、本遺跡中では最も多い。内訳は次のとおりである。

ナイフ型石器	4
搔器	2
細剥離痕のある石器	2
剥片・小剥片	69
礫	5

石質による内訳は次のとおりである。

黒曜石	72
チャート	5 (礫が1)
砂岩	5 (礫が4)

ナイフ型石器 (第12図)

5は、BH-60グリッド第Ⅱ層出土。チャート製である。打面を残し、先端はやや鈍角気味に加工されている。表面右縁及び左縁下半には、小規模な加工が施され、刃つぶしとなっている。側縁の加工はほとんどが裏面からの加工であるがごくわずかに表面からの加工がみられる。

20は、BH-60グリッド第Ⅱ層出土、チャート製で、5と同一母岩である。打面を残し、先端はやや直線的に加工されている。表面左縁及び右縁下半に小規模な加工を施し、刃つぶし加工をしている。側縁の加工はすべて裏面から施されている。刃部は節理面を利用している。

5と20は、石質、形態、加工方法において類似しているが、刃部が左右反対である。

38は、BH-61グリッド第Ⅱ層出土、黒曜石製である。先端は欠損している。打面を残し、表面右縁及び左縁下半に小規模な加工を施している。裏面基部には、パルパースカーを明瞭に残す。側縁の加工はすべて裏面からの加工が施されている。

46は、BG-61グリッド第Ⅱ層出土。黒曜石製である。表面右縁下半を欠損している。表面左縁に小規模な加工を施している。側縁の加工はすべて裏面からの加工である。裏面基部には、パルパースカーが明瞭に残る。

搔器 (第13図 6、25)

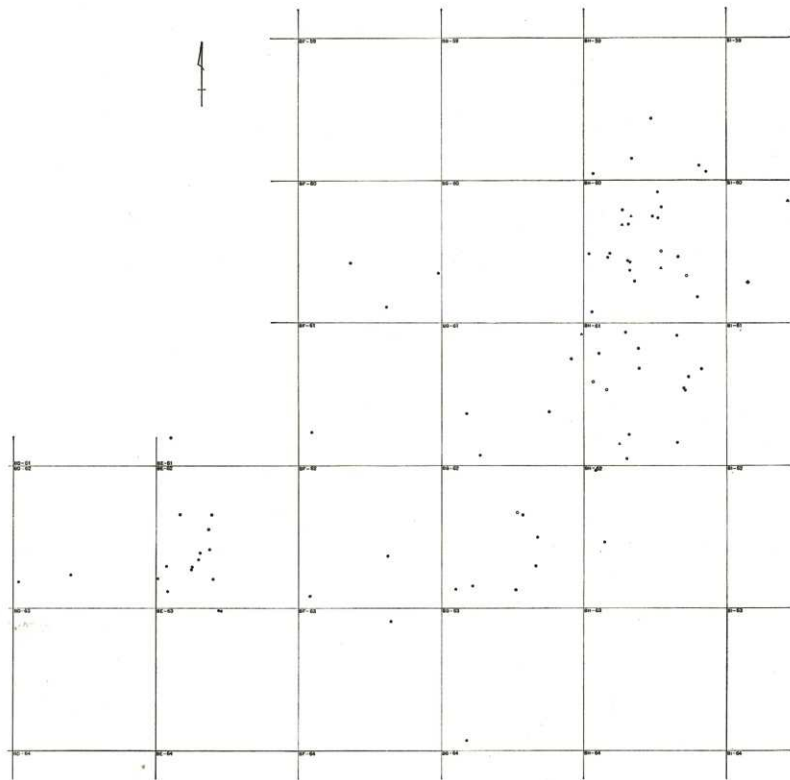
6は、BH-60グリッド第Ⅱ層出土。黒曜石製のラウンドスクレイパーである。上縁を除く縁辺に小規模な加工を施している。表面には一部自然面を残し、加工を施している。裏面上縁付近に加工がみられる。

25は、BI-60グリッド第Ⅱ層出土、黒曜石製のラウンドスクレイパーである。上縁を除く縁辺に小規模な加工を施されている。上縁は、表面方向からの打撃によって剥離がおこなわれている。素材の打瘤付近を使用しているが、上縁の剥離によって打点は削除されている。

細剥離痕のある石器 (第13図48、70)

48は、BG-61グリッド第Ⅱ層出土、黒曜石製である。上半を欠損している。表面左縁下半と右縁下半に細剥離がみられる。

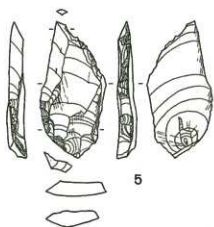
70は、BE-62グリッド第Ⅱ層出土、黒曜石製である。表面左上縁に細剥離がみられる。



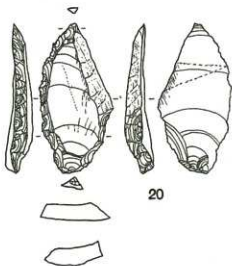
20.000

0 2m

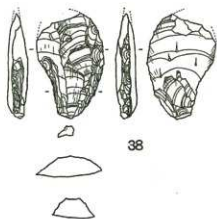
第11图 集中区C



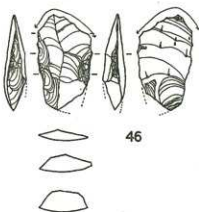
5



20



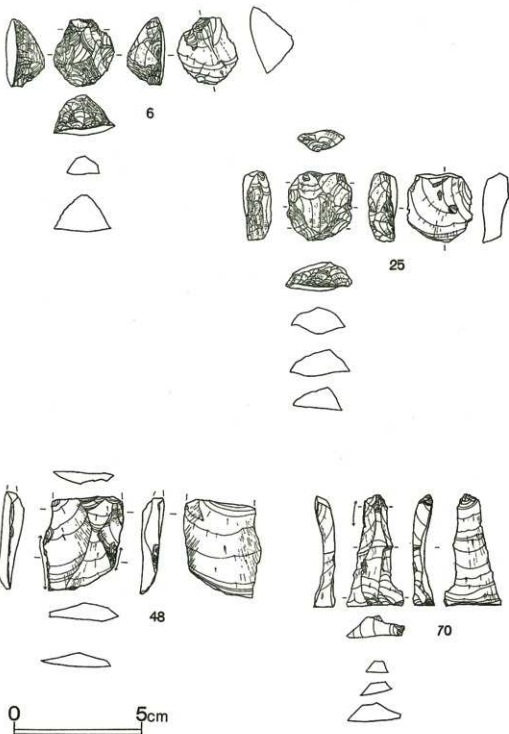
36



46



第12圖 集中区C出土石器(1)



第13图 集中区C出土石器(2)

集中区D (第14図)

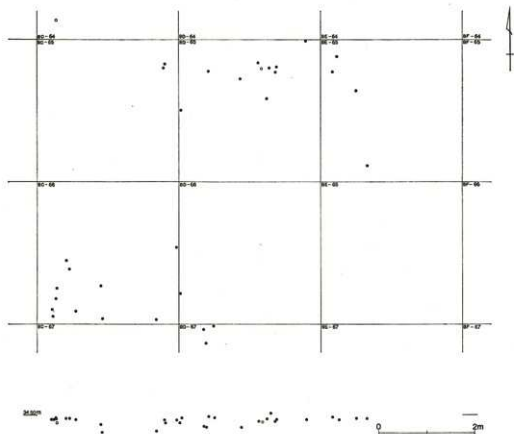
B D-65グリッドを中心とし、集中区Cの南西に広がる。集中区CとDは本来同一集中区の可能性もあるが、調査進行上の都合によりわけて調査をおこなった。石器・礫の総数は32点で、その内訳は次のとおりで、製品は出土していない。

剥片・小剥片	30
礫	2

石質による内訳は次のとおりである。

黒曜石	27
チャート	3 (礫が2)
粘板岩	2

石器・礫のなかで出土層位の明確なものは198点あり、それらはすべて第I層～第III層よりの出土である。



第14図 集中区D

第Ⅰ層	石器	20	礫	12	計	32
第Ⅱ層	石器	135	礫	27	計	162
第Ⅲ層	石器	3	礫	1	計	4

第Ⅰ層出土の石器は、そのほとんどが集中区Aから出土している。製品はなく、すべて剥片・小剥片である。本層は集中区A付近土層図（第5図）に図示できないほど削平がおこなわれており、削平と同時に遺物も失なわれてしまった可能性も考えられる。

第Ⅱ層からは、石器のほとんどが出土している。ナイフ形石器、搔器等の製品もすべて本層からの出土である。

第Ⅲ層出土の石器はわずか3点であり、すべて集中区Bより出土している。製品はなく、剥片・小剥片のみであり、本層のなかでも上層の第Ⅱ層に近い位置からの出土である。

礫は、その数が少なく、分布の密度は極めて薄い。最も多く出土した集中区Bにおいても20個であり、礫群とし難い状況である。

グリッド出土の先土器時代石器（第15・16図）

1は、CB-60グリッド出土のナイフ形石器である。先端が欠損している。表面左縁に小規模な加工を施し、下縁には自然面を残す。側縁の加工は表裏両面からおこなわれている。石質は粘板岩である。

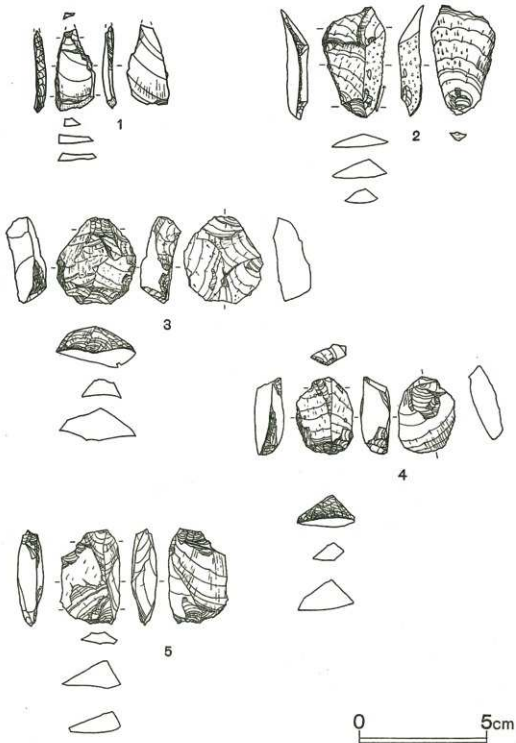
2は、CF-53グリッド出土のナイフ型石器である。打面を残しており、表面左縁上端の一部を欠損している。表面左縁には小規模な加工が施され、右縁下半には細剥離が見られる。表面左縁は自然面を利用している。裏面基部に加工が施されている。石質は黒曜石である。

3は、CE-53グリッド出土の搔器である。表面下縁から左右側、下半にかけて小規模な加工が施されている。裏面は、左右両方向からの剥離がおこなわれている。石質は黒曜石である。

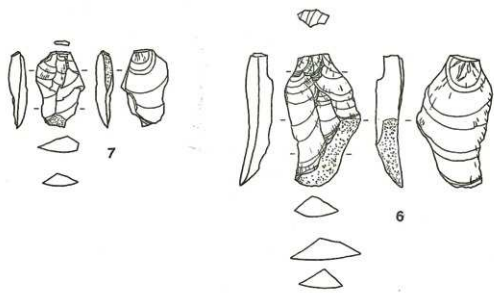
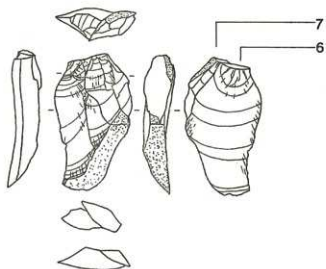
4は、古墳周期の覆土より出土の搔器である。打面を残す。表面下縁から左右側縁下半にかけ小規模な加工が施されている。裏面の打窪付近に加工がみられる。石質は黒曜石。

5は、表採で得られた楔形石器である。表面左面は自然面を残す。表裏両面の上縁と下縁に小規模な加工が施されている。石質は黒曜石。

6と7は接合例である（第16図）。6はBI-51グリッド、7はBI-52グリッドである。同一方向からの打撃によって剥離されている。表面右縁に自然面を残す。



第15図 グリッド出土先土器時代石器



0 5cm

第16圖 グリッフ出土先土器時代石器接合例

第1表 集中区A石器一覧表

番号	グリッド	北-南 (cm)	西-東 (cm)	標高 (m)	層位	石器名	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損	備考
2	B J-48	49	40	34.363	Ⅱ	剥片	砂岩	1.8	1.4	0.5	1.08		
3	〃	50	166.5	34.558	I	剥片	チャート	1.9	1.3	0.4	1.12		
4	〃	199	61	34.392	Ⅱ	剥片	チャート	3.5	1.7	1.1	4.62		
5	B J-49	294	288.5	34.503	I	小剥片	黒曜石	0.9	0.7	0.2	0.15		
6	B J-50	128	121	34.317	Ⅱ	剥片	黒曜石	2.6	1.7	1.4	4.63		
7	B I-50	247	136.5	34.295	Ⅱ	小剥片	黒曜石	0.8	0.6	0.1	0.07		
8	B I-49	101.5	282	34.510	I	剥片	細粒砂岩	1.9	3.0	0.4	2.15		
9	B J-49	104	9.5	34.311	Ⅱ	剥片	黒曜石	0.9	1.0	0.1	0.07		
10	B I-49	8	115	34.458	I	小剥片	粘板岩	2.3	2.5	0.4	2.23		
11	B I-48	290	138.5	34.308	Ⅱ	剥片	メノウ	1.9	1.0	0.9	1.49		
12	〃	264	132	34.321	Ⅱ	剥片	粘板岩	2.3	1.0	0.3	0.78		
13	〃	254	143	34.386	I	剥片	粘板岩	1.8	2.0	0.4	1.06		
14	〃	242	165	34.442	I	小剥片	黒曜石	1.7	0.7	0.3	0.27		
16	〃	252	220	34.462	I	剥片	粘板岩	1.6	2.5	0.7	2.42		
17	〃	243	208	34.471	I	剥片	粘板岩	1.0	1.0	0.2	0.19		
19	〃	159	155	34.605	I	剥片	黒曜石	3.3	1.7	0.7	3.25		
20	〃	181	123	34.606	I	小剥片	黒曜石	1.4	0.7	0.2	0.12		
21	〃	150	258	34.453	I	剥片	砂岩	1.1	2.2	0.5	1.10		
22	〃	16.5	116	34.598	I	剥片	砂岩	1.8	1.0	0.2	0.34		
23	〃	52	235	34.478	I	剥片	砂岩	2.3	1.2	0.3	0.82		
24	〃	157	87	34.384	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.3	2.3	1.4	3.97		
25	〃	174	85	34.380	Ⅱ	剥片	砂岩	2.1	0.9	0.3	0.58		
27	B H-49	156	140	34.445	I	小剥片	黒曜石	0.7	0.6	0.2	0.05		
29	B H-48	236	279	34.556	I	剥片	砂岩	2.2	2.1	0.5	3.03		
30	〃	237	295	34.457	I	剥片	砂岩	2.3	2.1	0.5	2.04		
31	〃	97	287	34.389	Ⅱ	剥片	黒曜石	2.3	2.2	0.6	1.40		
34	B H-47	94	197	34.548	I	剥片	砂岩	1.4	1.1	0.1	0.22		
40	B I-47	263	254	34.742	I	剥片	黒曜石	1.5	1.6	0.3	0.60		

第2表 集中区A 礫一覧表

番号	グリッド	北-南 (cm)	西-東 (cm)	標高 (m)	層位	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	完形	スス	赤化	備考
1	B J-47	100	56.5	34.507	I	チャート	3.1	3.9	2.9	49.04				
15	B I-48	246	219	34.439	I	チャート	10.3	6.7	5.4	374.09	○		○	
18	〃	203	181	34.415	I	砂岩	5.2	5.0	2.1	55.12				
26	B I-50	150	95	33.917	Ⅱ	チャート	2.4	1.7	1.2	6.23				
28	B H-49	88	294	34.526	I	チャート	0.7	1.7	0.6	1.00				
32	B H-47	56	253	34.499	I	チャート	11.5	5.5	5.3	570.67	○			
33	〃	62	251	34.491	I	砂岩	7.7	7.2	6.1	446.65	○			
35	〃	61	185	34.455	I	チャート	2.5	2.0	1.0	5.14				
36	〃	90	58	34.515	I	チャート	4.6	6.5	4.6	161.75				
37	B G-48	34	252	34.634	I	チャート	6.7	4.9	2.5	105.21				
38	〃	171	128	34.625	I	チャート	6.5	2.7	2.0	43.13				
39	〃	159	56	34.450	I	砂岩	3.8	5.3	2.4	40.23				
41	B I-48	50	234	34.813	I	細粒砂岩	7.2	5.1	2.3	64.06				

第3表 集中区B 石罫一覽表

番号	グリッド	北一南 (cm)	西一東 (cm)	標高 (m)	層位	石罫名	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損	備考
2	CB-55	252.7	129.6	34.378	I	制片	粘板岩	5.8	1.7	0.8	10.44		
4	"	207	278.6	34.368	I	制片	チャート	6.0	2.9	0.9	21.40		
5	CC-55	100	130	34.192	III	制片	チャート	5.7	1.9	1.0	8.85		
6	CB-56	135.4	239	34.235	I	制片	粘板岩	3.5	1.7	0.5	3.41		
7	CC-56	159	83.2	34.381	I	制片	粘板岩	5.0	1.7	0.7	4.51		
8	"	158	82.5	34.377	I	制片	粘板岩	2.7	1.4	0.3	1.19		
9	"	204.7	68	34.357	I	石核	細粒砂岩	5.5	2.4	2.2	47.01		
10	"	226.5	51.5	34.282	I	制片	粘板岩	7.9	2.5	1.2	24.27		
11	"	229.5	52.8	34.263	I	制片	粘板岩	2.8	2.7	0.6	6.88		
12	"	212.9	104.8	34.514	I	制片	粘板岩	4.4	2.2	0.7	7.22		
13	"	281	7.5	34.369	I	制片	チャート	6.7	2.3	0.7	10.35		No.44と接合
14	"	232	29.6	34.240	I	制片	砂岩	5.2	2.0	1.3	15.48		
15	CD-56	293.7	28	34.499	I	制片	砂岩	3.0	1.6	0.7	4.00		
16	CB-56	295.7	70.4	34.283	I	制片	砂岩	2.1	2.0	0.5	3.29		
17	CB-57	118	254	34.272	I	制片	粘板岩	7.4	1.8	0.6	8.42		
18	CB-58	181	219	34.275	I	制片	粘板岩	6.8	4.0	1.0	23.93		
19	CC-58	288.5	79.5	34.210	I	制片	石英	2.7	2.3	1.0	6.93		
20	"	286.5	138.5	34.186	III	制片	砂岩	3.8	4.2	0.7	10.34		
21	"	292	288.5	34.100	III	制片	粘板岩	2.5	2.0	0.9	3.40		
22	CC-57	45.2	240.5	24.230	I	制片	チャート	5.6	3.1	1.3	22.38		
23	CB-57	37	219	34.298	I	制片	粘板岩	5.6	1.8	0.9	10.00		No.45と接合
24	CB-56	16	245	34.292	I	局部磨製礫	砂岩	9.6	7.1	1.5	138.51		
25	CB-56	27	248	34.279	I	すり石	凝灰岩	10.0	5.4	5.4	445.95		
44	CB-60				I	制片	粘板岩	6.7	3.3	1.1	25.51		No.13と接合
45	古墳周堀				I	制片	粘板岩	5.4	2.3	0.9	3.37		No.23と接合

第4表 集中区B 礫一覽表

番号	グリッド	北一南 (cm)	西一東 (cm)	標高 (m)	層位	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	充形	スス	赤化	備考
1	CB-55	248	136.3	34.405	I	砂岩	6.0	2.7	2.2	26.14				○
3	"	214.1	268	34.486	III	チャート	4.7	5.1	2.0	51.20				○
26	"	278	133	34.287	I	砂岩	8.2	3.4	2.7	82.06				○
27	"	280	150	34.299	I	砂岩	7.2	3.4	2.3	60.98				○
28	"	287	155	34.295	I	砂岩	6.1	5.8	1.6	52.13				○
29	"	280	169	34.299	I	砂岩	2.6	2.4	1.6	7.50				○
30	"	291	132	34.299	I	砂岩	5.4	4.7	3.2	122.53				○
31	"	290	116	34.287	I	砂岩	7.5	7.2	3.0	06.05	○			○
32	CB-56	6	140	34.290	I	砂岩	6.0	6.1	3.0	106.07				○
33	"	11	145	34.281	I	砂岩	2.3	5.8	1.8	27.91				○
34	"	235	268	34.274	I	砂岩	10.4	5.2	3.8	234.44				○
35	"	243	294	34.277	I	灰岩	7.7	6.9	3.5	195.60				○
36	CA-58	45	223	34.367	I	砂岩	8.9	6.2	3.5	247.09				○
37	"	33	245	34.355	I	粘板岩	7.1	5.8	5.0	278.54				○
38	"	25	275	34.368	I	砂岩	9.1	7.1	4.3	360.96				○
39	CB-58	52	3	34.400	I	砂岩	2.3	5.2	3.3	52.92				○
40	"	17	3	34.365	I	砂岩	7.7	4.1	4.6	173.10				○
41	"	217	13	34.348	I	砂岩	8.3	6.4	2.6	151.04				○
42	"	224	15	34.350	I	砂岩	8.8	6.7	2.8	247.37				○
43	"	228	20	34.348	I	砂岩	5.1	3.9	3.2	57.69				○

第5表 集中区C 石器一覽表

番号	グリッド	北-南 (cm)	西-東 (cm)	標高 (m)	層位	石器名	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損	備考
1	BH-59	169	142	34.195	I	剥片	黒曜石	2.8	1.9	0.7	2.81		
2	"	255	103	34.399	I	剥片	黒曜石	2.0	2.4	0.6	1.70		
3	"	270	242	34.221	I	剥片	黒曜石	3.3	3.2	0.9	6.88		
4	"	287	11	34.508	I	剥片	チャート	1.6	2.0	0.7	2.19		
5	BH-60	77	99	34.266	I	ナイフ形石器	チャート	5.5	2.7	0.6	9.26		
6	"	94	80	34.176	I	掘器	黒曜石	3.0	2.4	1.5	7.64		
7	"	94	95	34.185	I	小剥片	黒曜石	0.8	1.0	0.1	0.13		
8	"	26	156	34.075	I	剥片	黒曜石	3.1	1.7	0.6	2.67		
9	"	57	164	34.120	I	小剥片	黒曜石	1.7	0.9	0.6	0.82		
10	"	80	155	34.246	I	小剥片	黒曜石	1.0	0.9	0.1	0.25		
11	"	76	144	34.095	I	剥片	黒曜石	0.9	1.7	0.3	0.30		
12	BH-59	282	257	34.120	I	小剥片	黒曜石	1.1	1.4	0.2	0.28		
13	BH-60	156	12	34.160	I	剥片	黒曜石	2.2	1.1	0.5	0.52		
14	"	153	56	34.170	I	小剥片	黒曜石	1.0	0.6	0.3	0.15		
15	"	161	52	34.116	I	剥片	黒曜石	1.8	0.9	0.2	0.40		
16	"	173	97	34.141	I	剥片	黒曜石	2.1	1.1	0.3	0.27		
17	"	169	94	34.152	I	小剥片	黒曜石	1.4	0.6	0.4	0.21		
18	"	189	98	34.170	I	剥片	黒曜石	2.7	1.6	0.6	1.96		
19	"	214	107	34.111	I	剥片	黒曜石	0.6	0.9	0.2	0.06		
20	"	186	162	34.258	I	ナイフ形石器	チャート	5.9	2.9	0.8	14.60		
21	"	163	198	34.149	I	剥片	黒曜石	2.3	1.6	0.4	1.19		
23	"	246	46	34.375	I	剥片	黒曜石	2.4	3.0	0.6	2.97		
24	B I-60	217	46	34.218	I	剥片	黒曜石	2.3	1.5	0.6	2.31		
25	"	45	128	34.507	I	掘器	黒曜石	2.7	2.5	1.1	8.11		
26	BH-60	277	18	34.167	I	剥片	黒曜石	1.4	0.9	0.4	0.33		
27	BH-61	21	88	34.141	I	剥片	黒曜石	1.9	1.6	0.2	0.58		
28	"	65	32	34.035	I	剥片	黒曜石	5.3	2.7	1.7	17.70		
29	"	97	116	34.385	I	剥片	黒曜石	3.2	4.2	1.8	6.82		
30	"	54	116	34.075	I	剥片	黒曜石	5.7	1.6	1.6	12.94		
31	"	28	195	34.256	I	剥片	黒曜石	3.9	2.0	1.0	6.93		
32	"	99	247	34.191	I	剥片	黒曜石	1.3	2.9	1.5	4.16		
33	"	116	220	34.223	I	剥片	黒曜石	0.6	1.5	0.5	0.66		
34	"	140	210	34.178	I	小剥片	黒曜石	0.9	0.5	0.2	0.06		
35	"	142	414	34.187	I	剥片	黒曜石	1.2	1.1	0.2	0.18		
38	"	255	74	34.192	I	ナイフ形石器	黒曜石	4.2	2.7	0.8	8.11		
39	"	236	95	34.165	I	剥片	黒曜石	1.2	1.4	0.3	0.32		
40	"	288	90	34.238	I	剥片	黒曜石	1.8	1.0	0.8	1.03		
41	"	253	197	33.910	I	剥片	黒曜石	2.0	1.1	0.3	0.66		
42	BH-62	13	25	34.366	I	剥片	黒曜石	1.3	1.3	0.2	0.21		
43	"	164	43	33.956	I	剥片	砂岩	2.9	1.2	0.5	1.06		
44	B F-60	197	293	34.148	I	剥片	黒曜石	0.9	1.3	0.3	0.31		
46	B G-61	26	295	34.261	I	ナイフ形石器	黒曜石	3.8	2.2	0.9	5.50		
47	"	279	80	34.265	I	小剥片	黒曜石	0.7	1.2	0.2	0.14		
48	"	192	52	34.108	I	細剥片 剥片の ある	黒曜石	2.6	1.2	0.5	7.54		
49	"	187	228	34.261	I	小剥片	黒曜石	0.8	1.0	0.2	0.09		
50	B G-62	106	172	34.365	I	剥片	黒曜石	4.3	1.7	0.8	0.61		
52	"	151	202	34.085	I	剥片	黒曜石	3.5	2.0	0.5	2.91		
53	"	213	198	34.098	I	小剥片	黒曜石	0.9	0.9	0.2	0.09		

第6表 集中区C 石器一覧表(2)

番号	グリッド	北-南 (cm)	西-東 (cm)	標高 (m)	層位	石器名	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損	備考
54	B G-62	255	65	34.358	I	剥片	黒曜石	3.4	2.0	1.0	4.33		
55	#	261	27	34.493	I	剥片	黒曜石	3.3	2.9	0.8	4.41		
56	B G-63	280	53	34.326	I	剥片	黒曜石	2.4	4.7	2.0	17.87		
57	B F-63	30	194	34.276	I	剥片	黒曜石	3.2	4.5	1.7	25.25		
58	B F-62	192	186	34.389	I	剥片	黒曜石	3.4	4.2	1.3	16.31		
59	#	276	24	34.310	I	小剥片	黒曜石	0.8	0.6	0.1	0.04		
60	B F-61	232	28	34.177	I	剥片	黒曜石	1.6	1.7	0.3	0.85		
61	B F-60	267	184	34.227	I	剥片	チャート	3.0	1.9	0.6	3.90		
62	#	174	109	34.493	I	小剥片	黒曜石	1.1	1.4	0.2	0.37		
63	B E-61	242	30	34.390	I	剥片	黒曜石	1.8	2.5	0.3	1.22		
64	B E-62	105	50	34.477	I	小剥片	黒曜石	1.0	0.4	0.2	0.06		
65	#	103	118	34.078	I	剥片	黒曜石	1.6	1.5	0.4	0.81		
66	#	137	109	34.330	I	剥片	黒曜石	0.9	1.3	1.5	1.32		
67	#	176	113	34.182	I	剥片	黒曜石	1.8	2.7	0.5	2.33		
68	#	185	93	34.175	I	剥片	黒曜石	2.7	1.1	0.4	1.19		
69	#	198	88	34.139	I	剥片	黒曜石	3.3	1.5	1.0	4.27		
70	#	241	120	34.327	I	剥片	黒曜石	0.5	1.1	0.3	4.22		
71	#	218	74	34.270	I	剥片	黒曜石	1.7	1.4	0.5	1.02		
72	#	214	22	34.470	I	剥片	黒曜石	1.0	1.3	0.2	0.32		
73	#	238	4	34.170	I	剥片	黒曜石	1.8	2.3	0.5	1.54		
74	#	266	23	34.132	I	剥片	黒曜石	1.1	2.0	0.2	0.48		
75	B E-63	6	136	34.227	I	剥片	黒曜石	3.9	1.4	0.8	3.81		
76	#	5	133	34.225	I	剥片	黒曜石	2.0	1.2	0.4	0.86		
77	B G-62	263	157	34.392	I	小剥片	黒曜石	1.1	0.5	0.3	0.09		
78	B E-62	216	76	34.106	I	小剥片	黒曜石	1.1	0.6	0.3	0.17		
79	B H-60	64	81	34.114	I	小剥片	黒曜石	1.1	0.6	0.2	0.12		
80	B G-61	76	276	34.107	I	剥片	黒曜石	1.3	1.6	0.6	1.11		
81	B D-62	246	10	33.985	I	剥片	黒曜石	1.2	1.1	0.3	0.40		
82	#	230	230	34.109	I	剥片	黒曜石	1.2	1.7	0.5	0.75		

第7表 集中区C 礫一覧表

番号	グリッド	北-南 (cm)	西-東 (cm)	標高 (m)	層位	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	完形	ス	赤化	備考
22	B H-60	202	217	34.082	I	チャート	1.8	3.6	1.5	11.13	○			
36	B H-61	142	47	34.087	I	砂岩	5.5	3.6	3.3	54.10				
37	#	125	20	34.223	I	砂岩	6.5	3.1	2.7	40.39				
45	B H-60	151	163	34.270	I	砂岩	2.7	4.2	2.3	19.20				
51	B G-62	100	160	34.222	I	砂岩	9.7	6.7	3.7	261.00	○			

第8表 集中区D 石器一覧表

番号	グリッド	北-南 (cm)	西-東 (cm)	標高 (m)	層位	石器名	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損	備考
1	BC-66	284	35	34.004	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.5	2.1	0.2	0.49		
2	〃	270	33	34.007	Ⅱ	剥片	黒曜石	0.7	1.4	0.5	0.25		
3	〃	275	83	33.999	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.3	1.6	1.0	0.77		
4	〃	290	138	34.138	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.4	0.8	0.5	0.54		
5	〃	220	135	34.297	Ⅱ	小剥片	黒曜石	1.3	0.9	0.3	0.19		
6	〃	292	252	34.141	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.5	1.0	0.3	0.28		
7	BD-66	236	2	34.327	Ⅱ	剥片	黒曜石	3.1	2.2	0.4	2.49		
8	BC-66	139	296	34.386	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.8	2.3	0.6	1.09		
9	〃	167	62	34.423	Ⅱ	小剥片	黒曜石	0.8	0.4	0.2	0.07		
10	〃	185	69	34.257	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.1	1.3	0.2	0.19		
11	〃	225	41	34.228	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.1	1.3	0.2	0.18		
12	〃	247	40	34.281	Ⅱ	剥片	黒曜石	2.4	0.8	1.0	1.47		
13	BD-67	6	75	34.252	Ⅱ	小剥片	黒曜石	0.9	0.5	0.3	0.09		
14	〃	12	53	34.250	Ⅱ	剥片	黒曜石	0.6	1.2	0.3	0.29		
15	〃	42	58	34.235	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.8	1.2	0.6	0.92		
16	BE-65	267	98	34.409	Ⅱ	剥片	黒曜石	3.4	1.5	0.3	0.68		
17	〃	108	76	34.405	Ⅱ	小剥片	黒曜石	1.1	0.8	0.1	0.11		
18	〃	69	25	34.441	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.8	1.6	0.8	2.22		
19	〃	35	36	34.393	Ⅱ	剥片	黒曜石	3.9	2.7	2.1	17.05		
20	BD-65	3	270	34.390	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.4	0.6	0.4	0.22		
21	〃	58	207	34.394	Ⅱ	小剥片	黒曜石	0.8	0.6	0.2	0.07		
22	〃	70	204	34.362	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.5	1.4	0.2	0.40		
23	〃	60	193	34.525	Ⅱ	小剥片	黒曜石	1.1	1.0	0.3	0.19		
25	〃	50	169	34.346	Ⅱ	小剥片	黒曜石	0.4	0.6	0.1	0.01		
26	〃	127	187	34.404	Ⅱ	剥片	黒曜石	1.6	1.4	0.4	1.00		
27	〃	83	131	34.232	Ⅱ	小剥片	黒曜石	1.5	0.6	0.1	0.09		
28	〃	68	63	34.465	Ⅱ	剥片	黒曜石	4.6	1.8	0.9	6.46		
29	〃	150	5	34.278	Ⅱ	剥片	粘板岩	5.0	1.5	1.3	6.12		
30	BC-65	60	269	34.384	Ⅱ	剥片	粘板岩	1.6	1.5	0.2	0.53		
31	〃	53	271	24.319	Ⅱ	剥片	チャート	1.5	2.0	0.3	1.22		

第9表 集中区D 礫一覧表

番号	グリッド	北-南 (cm)	西-東 (cm)	標高 (m)	層位	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	完形	スス	赤化	備考
24	BD-65	62	175	34.357	Ⅱ	チャート	5.0	1.8	1.0	10.08				
32	BC-64	261	41	34.339	Ⅱ	チャート	6.0	2.2	1.9	25.15				

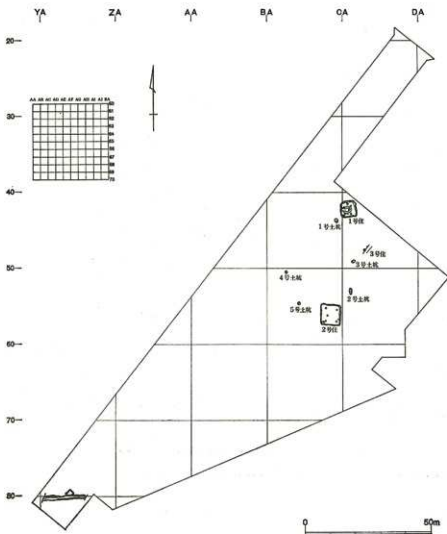
第10表 グリッド出土先土器時代石器

番号	グリッド	北-南 (cm)	西-東 (cm)	標高 (m)	層位	石器名	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損	備考
1	CB-60					ナイフ形石器	粘板岩	3.2	1.6	0.3	1.91	○	
2	CF-53					ナイフ形石器	黒曜石	4.4	2.5	0.9	7.07	○	
3	CE-53					撮器	黒曜石	3.5	3.1	1.3	11.68		
4	古墳周堀					撮器	黒曜石	3.0	2.3	1.1	7.01		
5	表探					楔形石器	黒曜石	3.7	2.4	1.0	7.33		
6	BI-51					剥片	粘板岩	5.2	2.9	0.9	12.51		
7	BI-52					剥片	粘板岩	3.0	1.8	0.6	7.74		接合

2. 古墳時代の遺構と遺物

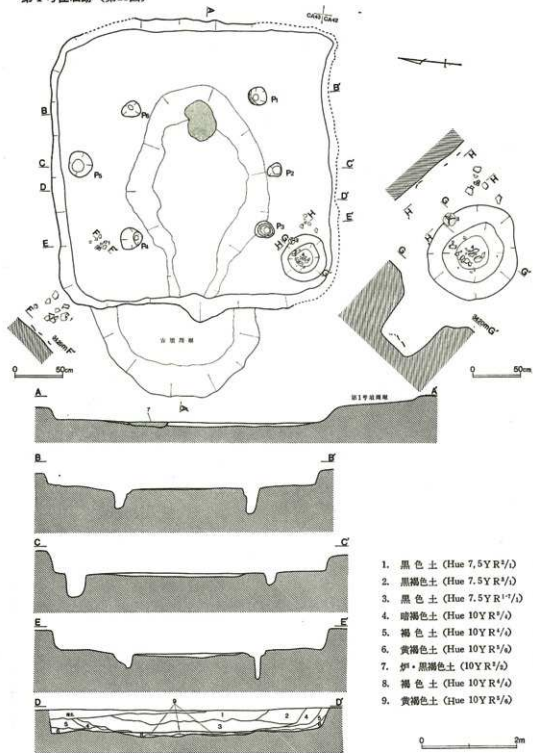
本遺跡において古墳時代の遺構として明確にとらえることができる遺構は、住居跡と鶴ヶ丘稲荷神社古墳のみである。土壌はそのほとんどが古墳墳丘下より検出されているが出土遺物が乏しく、溝状遺構からの出土遺物は縄文土器片が多い。したがって、土壌及び溝状遺構を古墳時代の遺構としたが、それを断定する要素は極めて少ない。

(1) 住居跡



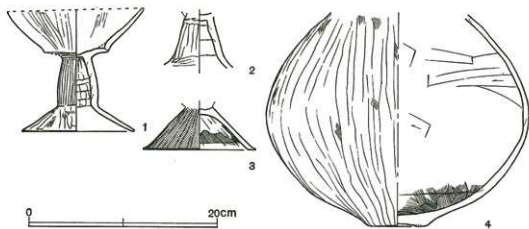
第17図 古墳時代全測図

第1号住居跡 (第18图)



第18图 第1号住居跡夹洞图 (L=34.60m、S=1/40、1/80)

C A-42グリッドを中心に位置し、北東コーナー及び南壁周辺は浅い掘乱を受けており、西壁において古墳の周堀の一部と重複している。規模は6.25×6.20mで方形を呈する。床面からローム面までは30~40cmを測る。主軸方位はN-83°-Eである。炉は深さ約12cmを測る地床炉で、不整形円形を呈し、中央やや東壁よりに設置されている。覆土は焼土粒子を多量に含む黒褐色土よりなる。ピットは6個検出され深さはP₁=56cm、P₂=27cm、P₃=61cm、P₄=30cm、P₅=46cm、P₆=42cmである。P₁、P₂、P₄、P₆は主柱穴と思われる。貯蔵穴は南西コーナー近くに設けられ、105×95cm、深さ約65cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。P₁-P₂-P₄-P₆を結ぶ線内から西壁中央付近にかけて住居跡掘り方が検出された。掘り方は床面からの深さ8~13cmを測り、P₃-P₅を結ぶ線より西壁に向かうにしたがってしだいに幅がせまくなっている。遺物はそのほとんどが小破片であったが、貯蔵穴内及びその周辺から高坏、壺等が検出された。

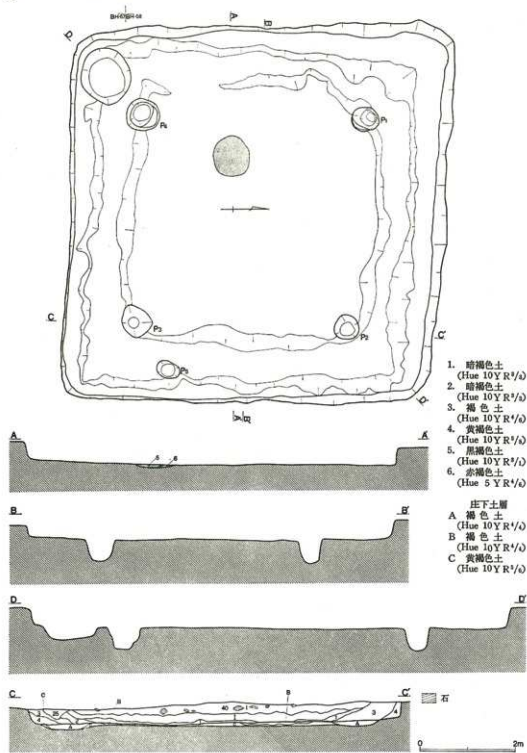


第19図 第1号住居跡出土遺物

第1号住居跡出土遺物 (第19図)

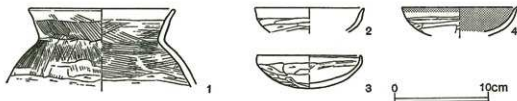
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
高坏	1	口径 14.5	口縁部やや内彎気味に開く。坏部に段をもつ。5mm大礫、白色微粒子、砂粒、赤色粒子を多量に含む5YR ⁷ /6橙	坏部内外面ナグの後縦ヘラミガキ。残下部は横ヘラミガキ。柱状部縦ヘラミガキ裾部ハケ調整の後横ナグレシミガキを加える。	坏部内面剥落著しい。口縁部60%。脚部90%残存。	
		底径 11.8				
		器高 13.0				
高坏	2	残存高 5.8	砂粒、赤色粒子を多量に含む。7.5YR ⁷ /6浅黄橙。	部分的なハケ調整の後、推なヘラミガキ。	脚部70%残存	
器台?	3	底径 12.0	赤色粒子、砂粒、白色微粒子を含む。外面朱彩。内面10YR ⁷ /6にぶい黄橙。	縦ヘラミガキ、内面は斜めハケの後裾部ヨコナグ、天井~中位にかけてミガキ様のナグツケ。	脚部90%残存	
		残存高 4.6				
壺	4	底径 6.4	胴部の歪みが激しい。赤色粒子を多量に含む。他に砂粒、2~5mm大礫、白色粒子。7.5YR ⁷ /6橙。内面10YR ⁷ /6黒褐。	ケズリの後肩部縦ハケ、胴部斜めハケ、その後入念なヘラミガキ。内面下部斜めハケ。	頸部~底部60%残存	
		胴部最大径 27.9				
		残存高 22.8				

第2号住居跡 (第20圖)



第20圖 第2号住居跡実測圖 (L=34.80m、S=1/80)

古墳南西墳丘下より検出され、B I—56グリッドを中心に位置する。規模は8.15×8.10mで方形を呈する。床面からローム面までは35~40cmを測る。主軸方位はN—90°—Eである。炉は深さ約7cmを測る地床炉で、わずかに東西に長い不整形を呈し、中央やや西壁よりに設置されている。覆土は焼土粒子を多量に含む赤褐色土とあまり含まない黒褐色土からなる。ピットは5個検出されP₁~P₄が主柱穴と思われる。深さはP₁=43cm、P₂=47cm、P₃=44cm、P₄=45cmである。貯蔵穴は南西コーナー近くに設けられ、117×104cmを測る。深さは15~28cmで南西コーナー方向にやや傾斜している。床面下の調査によって住居跡掘り方が検出された。掘り方は壁周辺と、主柱穴を結ぶ線内を6~13cm掘り込み、その間はわずかに数センチと非常に浅く方形ドーナツ台状となっている。遺物は極めて少なく、全て小破片であった。住居跡の覆土には古墳築造時の盛土と思われる土が混入しており、その土中には大小の礫、緑泥片岩片が多量に混入している(第26図墳丘断面参照)。



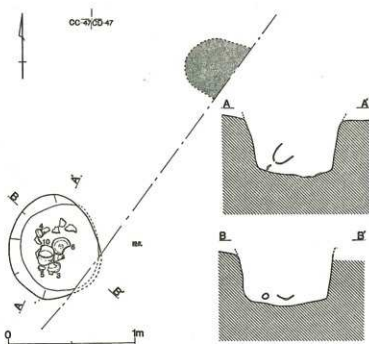
第21図 第2号住居跡出土遺物

第2号住居跡出土遺物(第21図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 15.4 残存高 8.2	口縁部やや外反気味に開く。砂粒を多量に含む、他に赤色微量子、軽石。2.5YR ⁶ /橙。外面煤付着	口縁部斜めハケの後口唇下1.5cm幅でココナゲ。胴部斜めハケ、部分的に斜めハケの上に縦ハケを交差させ、その後ミガキ様のナゲ調整。内面は口縁部斜め・横ハケの後口唇下1.5cm幅でココナゲ。胴部は斜め、横ハケの上をミガキ様ケズリ調整。	口縁部~胴部25%残存。
杯	2	口径 11.5 残存高 2.6	砂粒、赤色粒子、白色粒子を含む。7.5YR ⁶ /黒褐、内面2.5YR ⁶ /にぶい赤褐。	口縁部ココナゲ、体部横方向へラケズリ。内面は口縁部ココナゲ、以下ナゲ。	口縁25%残存
杯	3	口径 11.0 器高 3.6	赤色粒子を多量に含む。他に砂粒、白色微量子。5YR ⁶ /にぶい橙。内面5YR ⁶ /明赤褐。	口縁部ココナゲ、体部へラケズリ。内面は口縁部ココナゲ。	口縁部、体部70%残存
杯	4	口径 12.3 残存高 3.0	赤色粒子、白色微量子、砂粒を含む。口唇下約5mm、内面全面に朱彩。地色5YR ⁶ /橙。	口縁部ココナゲ、体部へラケズリ。内面は口縁部~体部中位までココナゲ、以下ナゲ。	口縁部、体部40%残存

第3号住居跡（第22図）

CC-47、CD-47
グリッドに位置するが、
わずかな焼土散布と貯
蔵穴を検出したのみで
あり、部分的に攪乱を
受けている。焼土の散
布が認められたところ
は炉跡と思われるが、
ローム上面にごくわず
かな焼土粒子が混じる
程度のもので掘り込み
もないという状態であ
る。貯蔵穴は残存規模
で78×73cm、深さ45cm
を測る。底面はやや凹
凸があるもののほぼ平
坦で、わずかに傾斜を
もって立ち上がる。焼

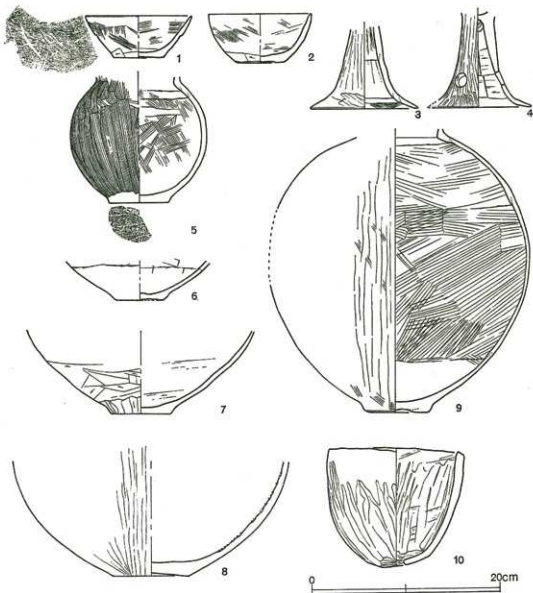


第22図 第3号住居跡実測図 (L=34.40m、S=1/30)

土散布西側から貯蔵穴周辺にかけて、黒色土の床面かと思われる固いブロック状の土が散在していたが耕作や攪乱を受け明瞭ではなかった。柱穴等の施設も検出できなかった。遺物は貯蔵穴内より埴、高坏、甕、壺、甗等多量に出土した。

第3号住居跡出土遺物（第23図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
椀	1	口径 11.4 底径 5.6 器高 4.5	体部中位に刃物研痕、わずにかあげ底。2～5mm大礫少量含む。他に砂粒、赤色微粒子、白色微粒子。7.5YR ^{6/1} にぶい橙。	口縁部～底部ケズリの後上半部斜め、縦ハケ、その後ナデ、内面は口縁部～底部横、斜めハケの後ナデ、底面は雑なミガキ。	口縁部～底部60%残存。
椀	2	口径 10.9 底径 5.3 器高 5.3	あげ底、3～5mm大礫多量に含む他に赤色粒子、砂粒、白色微粒子。7.5YR ^{6/1} にぶい橙。	口縁部～体部中位ケズリ、斜ハケの後ナデ。底部周辺ケズリ。内面は不定方向の雑なハケとケズリの後口縁部～底部ナデ、底面は雑なミガキ。	口縁部～底部60%残存。



第23図 第3号住居跡出土遺物

第3号住居跡出土遺物（第23図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	3	底径 11.5 残存高 8.8	柱状部から裾部へゆるやかに開く。砂粒、白色微粒子、赤色微粒子を多く含む。7.5YR ⁷ /橙。	柱状部ケズリの後縦ヘラミガキ、裾部斜めヘラミガキ、内面は柱状部上半絞り目残る。裾部脚部斜めハケ後ヨコナダ。	内面の剥落著しい。脚部80%残存%

第3号住居跡出土遺物（第23図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	4	底径 11.0 残存高10.2	柱状部から裾部へゆるやかに開く。3孔を有す。1~3mm礫、砂粒、白色微粒子を多く含む。10Y R ⁷ /、明黒褐。	全体に縦ヘラミガキ。裾部は柱状部の後にミガキを施す。透孔は外から内にむけて穿孔しナゲはない。内面天井部は右回りにえがっている。脚下半までケズリ、裾部ヨコナゲ。	脚のみ80%残存
壺	5	底径 6.4 胴部最大径 14.6 残存高13.5	最大径を胴部中央にもち、底部に木葉痕を有す。1~3mm大礫、赤色粒子、砂粒、白色微粒子多く含む。5Y R ⁷ /、にぶい赤褐、部分的に7.5Y R ⁷ /、褐。	下から上へ縦ハケ、内面は斜ハケの後雑なヘラミガキ。	頸部~底部25%残存。
壺	6	底径 5.2 残存高 4.2	底部部分的に剥落。1~3mm礫、砂粒、白色微粒子多量に含む。7.5Y R ⁷ /、橙、内面黒色化。	ケズリの後でいねいなナゲ。内面はナゲ。	底部90%残存
壺	7	底径 6.3 残存高 8.9	1~3mm礫、赤色粒子、砂粒やや多く含む。7.5Y R ⁷ /、にぶい褐。	胴部横、斜めのケズリ、底部周辺ナゲ。内面はナゲ。	底部40%残存
壺	8	底径 8.0 残存高12.2	あげ底。内面剥落著しい。砂粒、赤色粒子多量に含む。5Y R ⁷ /、橙	胴部縦ヘラミガキ、底面不定方向ヘラケズリ。内面はナゲ?	胴部中位~底部50%残存
壺	9	底径 7.1 胴部最大径 29.9 残存高27.8	あげ底。底部部分的に剥落。最大径を胴部中央にもつ。1~3mm礫砂粒を多量に含む。他に赤色粒子軽石微粒子。10Y R ⁷ /、にぶい黄橙内面10Y R ⁷ /、明黄褐。	ハケ調整の後縦ヘラミガキ。内面は横、斜めハケ頸部以下胴部下半に及ぶ。底面ナゲ。	胴部~底部70%残存
瓶	10	口径 14.4 器高 12.6	1~3mm礫、赤色粒子、白色粒子を多量に含む。10Y R ⁷ /、にぶい黄橙、一部10Y R ⁷ /、黒褐。	胴部ケズリの後ナゲ、縦ヘラミガキ、孔周辺横ヘラミガキ。内面は口縁部ナゲ、胴部ケズリの後縦ヘラミガキ、孔周辺ヘラケズリ。孔はケズリ放し。	80%残存

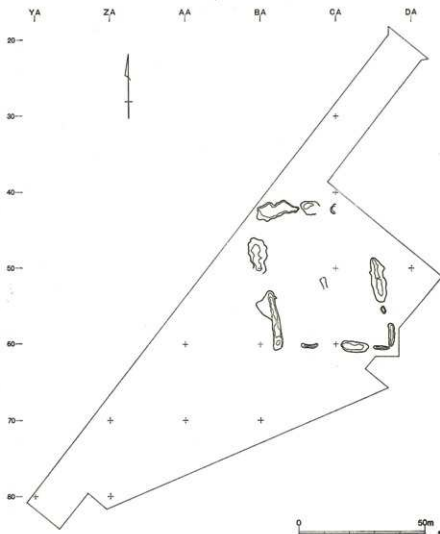
(2) 鶴ヶ丘稲荷神社古墳 (第24～28図)

古墳は調査区東半部にあり、鶴ヶ丘古墳群中唯一墳丘を残す古墳と思われる。

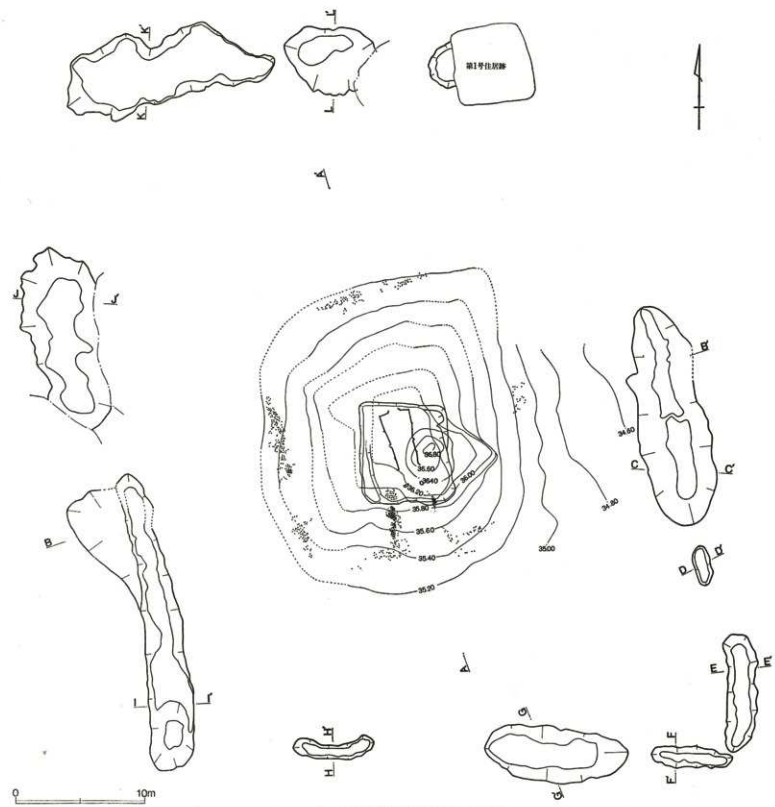
墳丘 (第25図)

現状は高さが2m程度あったが、茶の木、切り株、畝状の盛り上がり、溝が多数あり、墳丘測量の際、コンターの引けない地点が数か所ある。

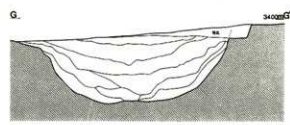
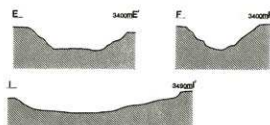
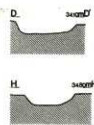
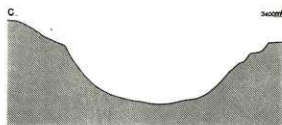
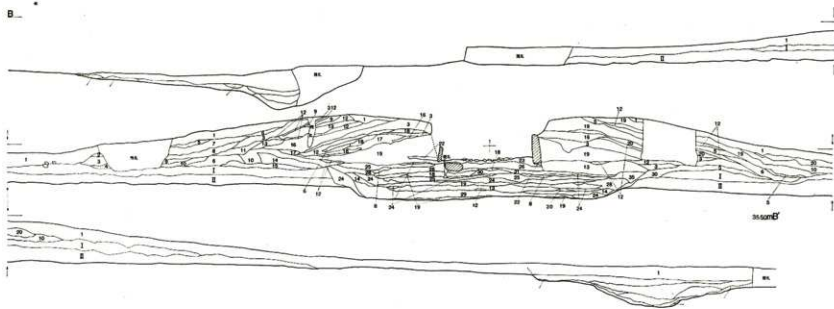
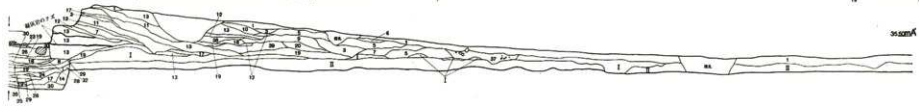
墳形は原形をとどめていないが、墳丘削平の際に出土した石列より、方墳と思われる。石列は、こぶし大の河原石を使用し、墳丘の東西南北をほぼ直線的に断续して検出され、南側の石列は石室前庭部へと続いている。石列のコーナー部は検出されていないが、標高が35.2m～35.4mの間に多くが集中し、その分布は平面的であった。石列は東西約20.5m、南北約21mを測る。



第24図 鶴ヶ丘稲荷神社古墳全測図



第25図 黒ヶ丘稲荷神社古墳実測図 (S=1/300)



- 古墳土層註
- I 黒褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 肌表土
 - II 褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 1 赤土
 - 2 黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 3 褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 4 黒色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 5 暗褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 6 黒褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 7 黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 8 黒褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 9 褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 10 に近い黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 11 黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 12 黒色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 13 明黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 14 暗褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 15 黒色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 16 に近い黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)
 - 17 褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 18 暗褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 19 褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 20 暗褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 21 褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 22 褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 23 暗褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 24 暗褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 25 褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 26 褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 27 褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 28 黒褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 29 暗褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 30 褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 31 暗褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 32 暗黄褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 33 褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 34 暗褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 35 暗黄褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
 - 36 黒褐色土 (Hue 7.5Y R²/5)
- ①~③は住居跡掘土参照

円形塚土層註

- a 黒褐色土 (Hue 10Y R²/5)
- b 黒色土 (Hue 10Y R²/5)
- c 暗褐色土 (Hue 10Y R²/5)
- d 黒褐色土 (Hue 10Y R²/5)
- e 褐色土 (Hue 10Y R²/5)
- f 黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)
- k 明黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)
- h 明黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)
- i 暗褐色土 (Hue 10Y R²/5)
- j 黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)
- k に近い黄褐色土 (Hue 10Y R²/5)

第26図 鶴ヶ丘館荷神社古墳墳丘・周堀断面図 (S=1/80)

周堀 (第25・26図)

本古墳の周囲を巡る溝状の遺構を端的に古墳の周堀とするには問題があるが、一応ここでは周堀として記しておく。

周堀は、墳丘周囲を断続的に巡り、南北辺がやや西に傾く長方形を呈しているが、北東部周辺は一部調査区外であり、調査区内も攪乱が著しいため検出されなかった。規模は周堀内縁で東西約40m、南北約53mである。掘り込みは、相対的に北辺が浅く、東辺及び南辺が深い。

東辺は断続的に3か所検出され、最も北側に位置するものは中央付近に段をもち、ローム面からの深さは最深部で1.7mを測る。南辺は東辺同様に断続的に3か所が検出された。中央に位置するものはローム面からの深さが最深部で1.6mを測る。西辺は断続的に2か所検出された。北側に位置するものは不整形である。北辺は断続的に3か所検出され、いずれも不整形を呈し、掘り込みも極めて浅い。西側に位置するもののローム面からの深さは、最深部で30cm足らずである。

周堀のコーナー部は、南東部においてのみ検出された。しかし南東コーナー部も東辺と南辺の間がわずかに切れる。

石室 (第27図)

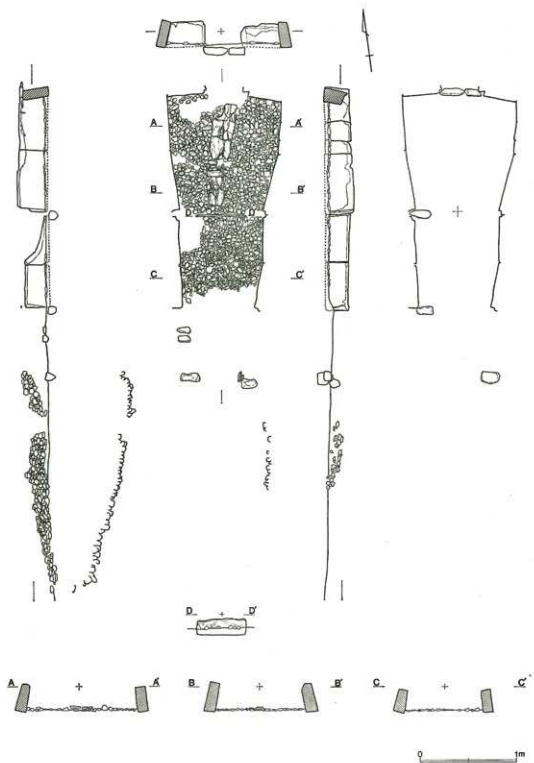
墳頂よりわずかに南で検出され、凝灰岩の切石を使用した横穴式石室の最下段及び棺床面が残存していた。

石室はいわゆる「羽子板状」を呈する複式構造で、主軸方位は $N-16^{\circ}-W$ である。全長4.53m、うち奥室長2.58m、前室長1.95mで、奥室最大幅2.40m、玄門幅1.75m、羨門幅1.51mである。奥室棺床面には平均こぶし大の河原石を敷きつめ、中央に緑泥片岩による棺座を設けている。棺座は全長2.14m、最大幅0.43mであり崩壊が激しいが最低3枚の緑泥片岩を使用していると思われる。前室棺床面は奥室と同様に河原石を敷いているが、羨門に近づくにつれ小さくなる傾向がある。奥室、前室ともに棺床面の河原石がない部分があるが、これは盗掘時に排除されたものと思われる。

奥室と前室との境に「^{しほかいし}柵石」が設置されていた。柵石は長さ10.6cm、高さ38cm、厚さ4cmの緑泥片岩を使用している。また、羨門付近には多量の緑泥片岩片が散在しており、羨門部にも何らかの形で緑泥片岩を使用していたと思われる。

奥壁は、中央の石がなく、左右の石のみが残存していた。左右の石にはそれぞれの中央寄りの端部に石室内側からの切り込みがある。中央の石はその周辺に緑泥片岩片が散在していたことから、緑泥片岩を使用していたと思われる。左側壁は奥室2枚、前室2枚の切石を使用しており、最大のものは 129×64 cm、厚さ24cmを測る。右側壁は奥室2枚、前室2枚の切石を使用しているが、奥壁と接する石は2か所に亀裂が生じている。左右側壁の玄門部、羨門部の石には切り込みがある。前室の4枚の切岩は奥室に使用されているものより長さ、高さともに一回り小さい切岩を使用している。切石はノミ痕を明瞭に残し、石室内面はていねいに仕上げているが、裏面は内面に比べてやや雑な仕上げである。また、奥室及び左側壁の切り込み部の棺床面下より人頭大の河原石の根石が検出された。

羨道はそのほとんどが破壊され、わずかに根石の一部が残るのみであり、羨門より平行に約1.4m延び、前庭部に続いている。根石は人頭大の河原石の平担面を上にし、その長軸が石室主軸に対



第27図 鷺ヶ丘稻荷神社古墳、石室測図 (L=35.5m、S=1/80)

し直角となるように設置されている。床面は棺床面よりやや高くなり、固くたたきしめられている。

前庭部は、破壊が著しく、特に右側石列は一部を残すのみでほとんど残存していない。石列は「ハ」の字に開くが、左側石列は羨道根石より西側に片寄っており、前庭部全体では片袖型のような形態をとるものと思われる。石列端部は羨道南端の根石より約22mのところで石室主軸と垂直に東西に延び、墳丘の石列へ続く。

石室掘り方（第28図）

石室周辺の墳丘を旧表工（第1層）上面まで削平した際、石室周辺に長方形の落ち込みが検出され、土層観察の結果石室の掘り方と判断した。

掘り方は、7.90m×6.60mの平行四辺形に近い長方形を呈し、南東コーナーは丸味を帯び不整形である。深さは棺床面より92cmを測り、中央付近はやや浅く81cmを測る。掘り方西辺は一段の段がありテラス状になっている。主軸方位は南北であり、石室の主軸方位と異なる。しかし、西辺の段及び東辺下場の方位はほぼ石室主軸方位と同一である。

掘り方は旧表土より掘り込まれており、底面はローム層まで達し、ほぼ平坦であるが、わずかに中央部が高く、西側が低くなっている。

掘り方内は非常にいいねいな版築がおこなわれていた。版築は上半と下半では若干の差がみられ、上半部がよりにいいねいに作られており、総じてローム及びロームブロックやそれらを多量に含む土を使用している。

棺床面直下にあたる第23層には石室に使用されたと思われる緑泥片岩を多量に含んでおり、その下位の第26・27層はほとんどローム土による構成で、非常によくつき固められている。第35層はほとんど凝灰岩片による構成である。下半部は上半部の版築よりやや雑であり、つき固めも弱く上半部に比べるとしまりがやや悪い層が目立つ。

石室掘り方は、石室の規模よりかなり大きく造られており、特に東西方向は墳丘下にまで達している。また、掘り始めの軸方位と掘り上った軸方位が異なる点も特徴の一つと言えよう。

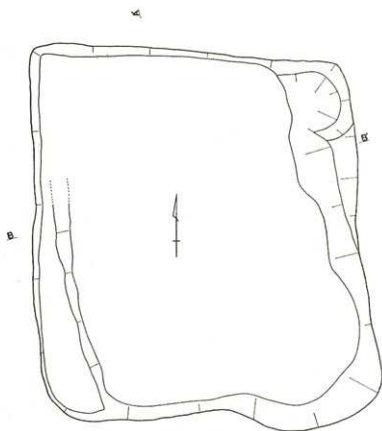
墳丘はいいねいな版築によって造られており、石室周辺は特に顕著である。版築は旧表工より施されている。石室周辺にはローム土、ロームブロックを含む土を多く使用しており、第13層はハードロームをつき固めている。石室奥壁北側の第13層は厚く版築されているが、その間2か所に凝灰岩の破片が層をなして存在する。また墳丘下にある第2号住居跡が埋まりきらないうちに版築を施している。

出土遺物

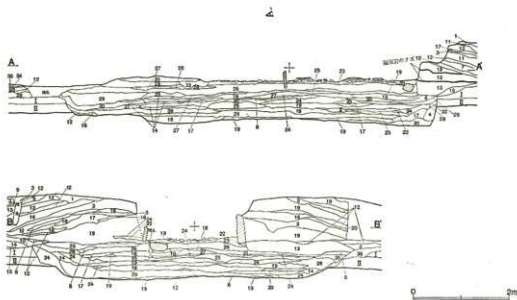
石室からの出土遺物は、鉄片が10数片出土したのみで他は古墳に直接係わりのない縄文式土器片である。鉄片の多くは釘と思われるものがある。

墳丘からは先土器時代、縄文式土器片等が多数出土している。

周堀からは坏、壺、甕、高坏の脚部と思われる土器（第29図）の他、先土器時代の石器が多数出土している。



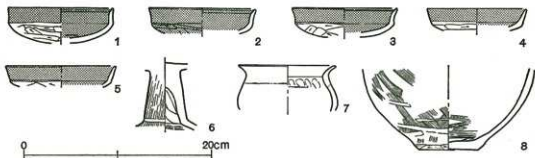
- 1 黒褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 2 褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 3 表土
- 4 褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 5 黒褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 6 暗褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 7 黒褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 8 黄褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 9 黒褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 10 褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 11 にぶい黄褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 12 黄褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 13 黒褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 14 明黄褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 15 暗褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 16 黒褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 17 にぶい黄褐色土 (Hue 10YR^{2/2})
- 18 褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 19 暗褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 20 褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 21 暗褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 22 褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 23 暗褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 24 褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 25 暗褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 26 褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 27 暗褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 28 褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 29 暗褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 30 褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 31 暗褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 32 極暗褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 33 褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 34 暗褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 35 極暗褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})
- 36 黒褐色土 (Hue 7.5YR^{2/2})



第28図 鶴ヶ丘稻荷神社古墳石室掘り方実測図 (L=35.5m、S=1/80)

古墳周堀出土遺物 (第29図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	1	口径 11.1 残存高 3.7	口縁部やや外反気味に立ち上がる砂粒を多量に含む、他に白色微粒子、赤色粒子。外面口縁部、内面は全面に朱彩。7.5Y R ⁴ /、明橙。	口縁部ヨコナゲ、体部ヘラケズリ 内面は口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ	口縁部～底部25%残存。
杯	2	口径 11.3 残存高 2.1	口縁部やや外反気味に立ち上がる砂粒、赤色粒子、白色微粒子を含む。内外面朱彩。7.5Y R ⁴ /、橙。	口縁部ヨコナゲ、体部ヘラケズリ 内面はヨコナゲ。	口縁部50%残存
杯	3	口径 11.2 残存高 3.1	口縁部やや外反気味に立ち上がる口縁部との境目に稜を持つ。内面口唇下に緩い稜を持つ。砂粒を多量に含む。他に白色微粒子、赤色粒子。外面口縁部、内面は全面に朱彩。7.5Y R ⁴ /、橙。	口縁部ヨコナゲ、体部ヘラケズリ 内面は口縁部ヨコナゲ、以下ナゲ	口縁部～底部30%残存。
杯	4	口径 10.5 残存高 2.3	口縁部と体部の境目にごく浅い沈線を持つ。2～4mm礫、砂粒、赤色粒子、白色微粒子を含む。外面口縁部、内面全面に朱彩。7.5Y R ⁴ /、にぶい橙。	口縁部ヨコナゲ、体部ヘラケズリ 内面は口縁部ヨコナゲ、以下ナゲ	口縁部30%残存
杯	5	口径 11.7 残存高 2.2	口縁部と体部の境目に稜を持つ。砂粒、赤色粒子、黒色粒子を含む外面口縁部、内面全面に朱彩。7.5Y R ⁴ /、にぶい橙。	口縁部ヨコナゲ、体部ヘラケズリ 内面は口縁部ヨコナゲ。	口縁部20%残存
高杯?	6	残存高 7.3	砂粒、黒色粒子、白色微粒子、赤色微粒子を含む。7.5Y R ⁴ /、橙。	ケズリの後右上りの入念なヘラミガキ、裾部ヘラミガキ。内面は柱状部ナゲツケ、裾部ハケの後ヨコナゲ。杯部放射状の入念なヘラミガキ。	脚70%残存。
小形壺	7	口径 10.2 残存高 4.9	1～3mm礫、砂粒多量に含む。7.5Y R ⁴ /、橙。	口縁部ヨコナゲ、肩部以下でいねいなナゲ。内面は口縁部ヨコナゲ 肩部ナゲの後指頭押し、肩部以下ナゲ。	口縁部～胴部中位20%残存。
壺	8	底径 6.2 残存高 8.1	1～3mm礫、砂粒を多量に含む、他に赤色粒子。5Y R ⁴ /、にぶい橙 内面10Y R ⁴ /、にぶい黄橙。	胴部縦、斜めハケの後部分的ナゲ 底部周囲ケズリ、底面ケズリ。内面は横、斜めハケの後ナゲ。	胴部下位～底部30%残存。



第29図 古墳周堀出土土物

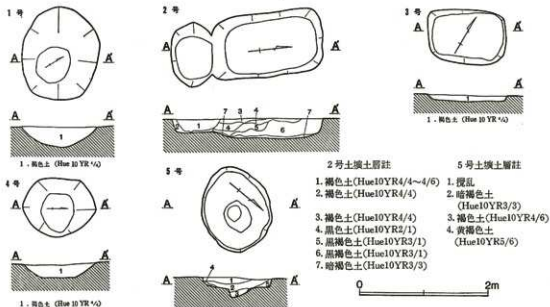
(3) 土塚・溝状遺構 (第30・31図)

1号土塚

B J—43グリッドに位置し、1.16×0.94mの楕円形を呈し、深さ31cmを測る。長軸方位はN—8—Wである。底部は皿状をなす。

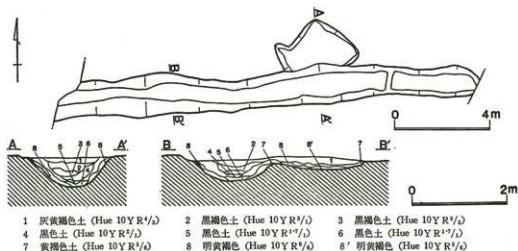
2号土塚

C B—53グリッドを中心に位置し、大小2基の土塚が重複しており、全長は2.42mを測る。北側に位置する土塚(大)は南側の土塚に切られているため長軸は不明であるが短軸1.01m、深さ30cmを測り、隅丸長方形を呈すると思われる。底面は平坦である。遺物は甕または壺の胴部の一部と思



第30図 土塚実測図 (L=34.6m, S=1/60)

- 2号土塚土層註
1. 褐色土(Hue10YR4/4~4/6)
 2. 褐色土(Hue10YR4/4)
 3. 褐色土(Hue10YR4/4)
 4. 黒色土(Hue10YR2/1)
 5. 黒褐色土(Hue10YR3/1)
 6. 黒褐色土(Hue10YR3/1)
 7. 暗褐色土(Hue10YR3/3)
- 5号土塚土層註
1. 擾乱
 2. 暗褐色土(Hue10YR3/3)
 3. 褐色土(Hue10YR4/6)
 4. 黄褐色土(Hue10YR5/6)



第31図 溝状遺構実測図 (L=35.10, S=1/160)

われる破片が一片出土している。南側に位置する土塊(小)は1.00×0.76mの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。長軸方位はN-82°-Wである。底面はほぼ平坦で傾斜をもって立ち上がる。

3号土塊

CB-48、CB-49グリッドに位置し、1.24×0.86mの隅丸長方形を呈し、深さ8cmを測る。長軸方位はN-62°-Eである。底面はほぼ平坦で東辺の立ち上がりはやや急である。覆土中に微量の焼土粒子を含む。

4号土塊

CB-50グリッドに位置し、1.16×0.94mの楕円形を呈し、深さ21cmを測る。長軸方位はN-4°-Eである。底部は平部は平坦でなだらかな傾斜をもって立ち上がる。

5号土塊

BE-54グリッドに位置し、1.32×1.09mの楕円形を呈し、中心付近にピット状の落ち込みをもつ。最深部の深さは32cmを測る。長軸方位はN-38°-Eである。覆土は4層に分層されるが、第2層中に少量の焼土が含まれる。

溝状遺構(第31図)

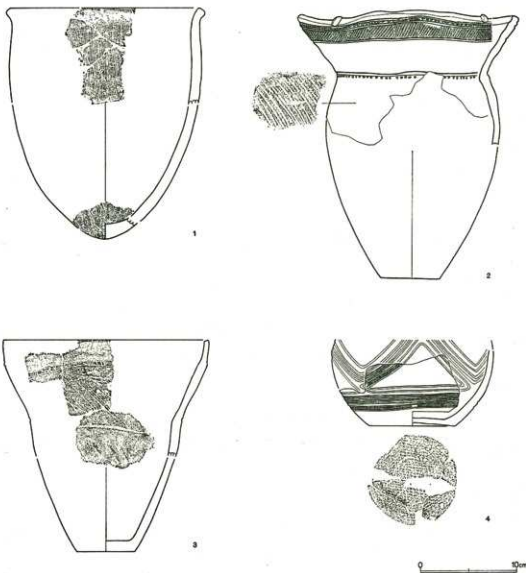
調査区の南西隅、YD-80グリッドを中心に位置し、ほぼ東西方向に走り、東端、西端共に攪乱を受けている。幅1.79~1.09m、底部幅0.37~1.04m、深さ27~55cmを測る。底面は東方約4分の1のところ段をもち東方へ高くなり、西方に向りにしたがってしだいに幅狭となる。溝中央よりやや東方に浅く広がる部分をもつ。覆土は9層に分層されるが、第2~4層中には焼土粒子が含まれる。遺物は縄文前期の土器片が出土している。

3. グリッド出土遺物

(1) 縄文式土器 (第32・33図)

本遺跡の縄文時代の土器はすべてグリッド内より出土したもので遺構に伴うものはない。ここで言うグリッドとは古墳の墳丘内及び周堀内から出土した土器を一括している。

出土した土器は、量的にはさほど多くはないが、時期的には早期燃系文系から後期加曾利B系まで多期にわたっている。



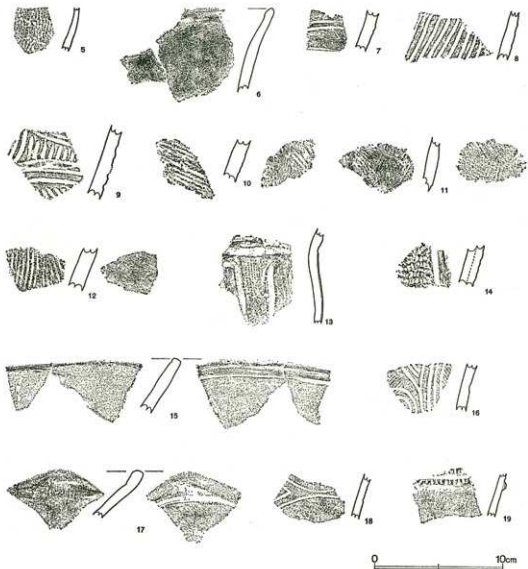
第32図 グリッド出土遺物 (1)

第1群 (1・5～12)

早期の土器を一括した。1、5、6は燃糸文系の土器である。1は口縁周辺と底部のみが検出され、胎土に3～5mmの小礫が目立ちにぶい橙を呈す。5は砂粒、白色微粒子が目立ち橙を呈す。6は無文土器であり、砂粒が目立つ。褐色である。

7～9は沈線文系の土器である。7は2条の浅い沈線が描出されている。胎土は砂粒を多量に含んでいるが、器面はよく研磨されている。にぶい黄橙を呈する。8と9は太沈線が施文され、胎土は砂粒を含むが緻密である。にぶい黄橙である。

10～12は条痕文系の土器である。10は斜めの条痕が施され、裏面にはかなり雑に施されている。



第33図 グリフ出土遺物 (2)

砂粒、石英が目立つ。黒褐色を呈する。11は表面の磨滅が著しくわずかに条痕が残る程度である。胎土は粗く、砂粒が目立つ。赤褐色を呈する。12は条痕を明瞭に施しており、胎土も緻密である。赤褐色である。

第2群 (13・14)

中期加曾利E式に属するものである。13は胴部を沈線によって区画され、その間に燃糸文をもつ。3～5mmの小礫、砂粒が目立ち赤褐色を呈する。14は胴部に沈線で区画された磨消縄文をもつ。胎土は緻密でにぶい橙である。

第3群 (2～4・15～19)

後期堀之内式、加曾利B式の土器を一括した。

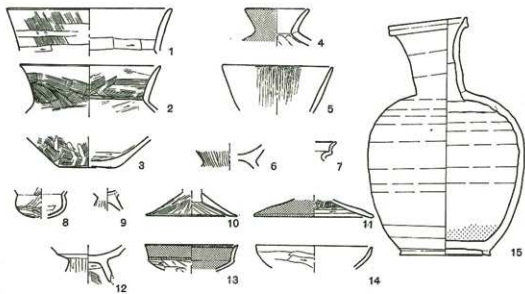
2は深鉢であり、口縁部から胴部上位にかけてのみ残存している。4単位のゆるやかな波状口縁を呈し、波底部に小突起を有する。口縁部上位に磨消縄文が施され、その下位に頸部無文帯をもつ。胴部は斜位の沈線が施されている。胎土は緻密でにぶい橙を呈する。3は頸部に斜位（右下がり）の数条の沈線が施されている。胎土は緻密であるが、やや砂粒が目立つ。4は注口土器であろう。底部、胴下半のみが残存しており、底部に網代痕がある。集合沈線による文様が施され、器壁は非常にいいに研磨されている。胎土は砂粒が目立つが緻密である。にぶい橙を呈する。15は内面口唇下に一条の沈線を有する。胎土はやや粗く砂粒が目立つ。明褐色を呈する。16は太い沈線によって施文され、部分的に磨消縄文がみられる。内面の研磨はいいである。砂粒を含むが胎土は緻密である。17は波状口縁片である。口縁は肉厚で、内面に一条の太い沈線を有する。胎土は砂粒が目立ちやや粗い。にぶい赤褐色を呈する。18は沈線によって区画された中に磨消縄文が施されている。胎土は緻密で、暗赤褐色土を呈する。19は紐が貼付され点列が添加されている。いい研磨がおこなわれており、胎土は砂粒が目立つ。赤褐色を呈する。

(2) 古墳時代以降の土器 (第34・35図)

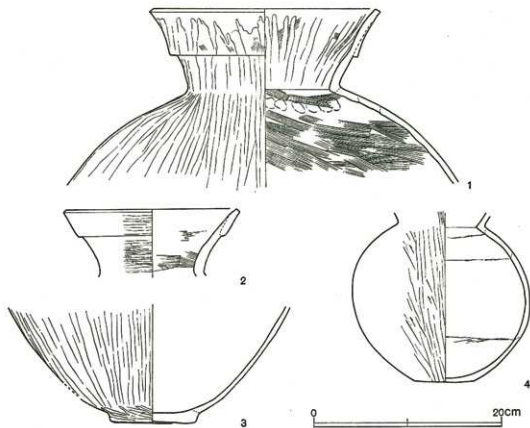
グリッド出土の遺物は、そのほとんどが鶴ヶ丘稲荷神古墳墳丘より出土したものである。

古墳墳丘下としたものは、墳丘下の旧表土からの出土で、遺構は検出されず、遺物のみがかなりまとまった状態で出土している。

遺物は、古墳時代と思われるものが主体をしめるが、須恵器の長頸壺(第34図15)のように9世紀代と思われる遺物も出土している。長頸壺は古墳墳頂部付近にかなり散在した状態で出土した。また、わずか一片であるが、S字口縁が出土している。(第34図7)



第34図 グリッド出土遺物 (3)



第35図 古墳墳丘下出土遺物

グリッド出土遺物(3) (第34図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 17.4 残存高 4.8	砂粒、黒色微粒子少量含む。5 Y R ¹ / ₄ 橙。	斜ハケの後ヨコナゲ。内面は木口状工具によるヨコナゲ、頸部以下ナゲ。	口縁部25%残存
甕	2	口径 14.9 残存高 5.0	砂粒多量に含む、他に赤色粒子。5 Y R ¹ / ₄ にぶい橙。	斜めハケの後上部ヨコハケ。内面は横、斜めハケの後口縁部ヨコナゲ。	口縁部90%残存 №3と同一個体か。
甕	3	底径 6.1 残存高 3.3	フーナツ状あげ底。砂粒多量に含む、他に赤色粒子。5 Y R ¹ / ₄ にぶい橙。	縦、斜めハケの後部分的にヘラミガキ。底部ケズリの後ナゲ。内面は木口状工具による不定方向ナゲ。	底部80%残存。 №2と同一個体か。
小形壺 (罎)	4	口径 6.7 残存高 3.9	砂粒、赤色微粒子、白色微粒子を多量に含む。外面朱彩。5 Y R ¹ / ₄ 橙。	ナゲの後ヘラミガキ。内面は不明瞭。	内面剥落著しい 口縁部～肩部80%残存。
罎	5	口径 11.7 残存高 5.1	砂粒、白色微粒子、赤色粒子含む。7.5 Y R ¹ / ₄ 橙。	内外面ヨコナゲの後ヘラミガキ。	口縁部20%残存
台付甕	6	残存高 3.6	砂粒、1～2mm小石、赤色微粒子白色微粒子含む。2.5 Y R ¹ / ₄ 橙。甕底部黒褐。	やや右下り斜めハケ。甕内面ナゲ	甕底部～台接合部30%残存。
S字甕	7		段部はしっかりしている。砂粒多量に含む。他に白色微粒子、赤色微粒子。7.5 Y R ¹ / ₄ にぶい褐。	ヨコナゲ。内面口唇下に弱い沈線	口縁部10%残存
罎	8	胴部最大径 5.5 残存高 3.2	わずかに砂粒、赤色微粒子含む。10 Y R ¹ / ₄ 明黄褐。	ケズリの後極めて入念なヘラミガキ。内面は木口状工具によるナゲ	内面剥落著しい 60%残存。
器台?	9	残存高 2.0	ミニチュア。砂粒、赤色粒子、黒色粒子含む。7.5 Y R ¹ / ₄ 橙。	ヘラミガキか。内面ナゲ。	摩滅激しい。 脚60%残存。
器台?	10	底径 9.8 残存高 2.5	砂粒、赤色粒子含む。5 Y R ¹ / ₄ 橙	縦、斜め方向のていねいなヘラミガキ。内面は裾部ヘラケズリ、上位ナゲ。浅いハケメが浅る。	脚25%残存。
高杯?	11	底径 12.8 残存高 1.9	砂粒、黒色微粒子、白色微粒子、赤色微粒子多量に含む。外面朱彩内面 5 Y R ¹ / ₄ 橙。	ケズリの後ナゲ。内面は裾部ナゲ中位ケズリの後ヘラミガキ、上位はハケメの後部分的なヘラミガキ	脚20%残存。
高杯	12	残存高 4.0	杯部に小さい段をもつ。1～3mm礫、赤色粒子、砂粒を含む。2.5 Y R ¹ / ₄ 橙。	脚部ケズリの後ヘラミガキ、杯部ケズリの後ミガキか。内面は天井部ナゲ、脚部斜めハケの後ナゲ。	杯部内面摩滅激しい。脚70%残存。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	13	口径 9.9 残存高 2.8	杯部と体部の境目に稜をもつ。發の約3mm上位にごく浅い沈線。砂粒をやや多く含む、他に赤色粒子白色微粒子、黒色粒子。外面口縁部と内面全面に朱彩。7.5Y R ¹ / ₁ にぶい赤褐。	口縁部ヨコナゲ、体部ヘラケズリの後ナゲ。内面口縁部ヨコナゲ、以下ナゲ。	口縁部～体部25%残存。
杯	14	口径 12.4 残存高 2.4	砂粒、赤色粒子、白色粒子を含む7.5Y R ¹ / ₁ にぶい褐。	口縁部ヨコナゲ、体部ヘラケズリ内面は口縁部ヨコナゲ、以下ナゲ	口縁部～体部20%残存。
須恵器 壺	15	口径 8.8 胴部最大径 16.8 高台径 9.8 器高 25.3 高台高 0.5	長頸壺。底面ほぼ平面を呈し、周縁に外方に張り出す台部を付す。胴下半の径が広い。口縁端部に面をつくり、上端部がくぼむ。口縁内部がくぼむ。高台は断面がやや台形に近く、その端部がくぼむ。黒色微粒子、白色微粒子、砂粒を含む。7.5Y R ¹ / ₁ 灰。	粘土紐巻きあげ、クロ右回転。はりつけ高台、胴部下位ヘラケズリ。切りはなし不明。	口縁部～底部50%残存。

古墳墳丘下出土遺物 (第35図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 24.5 残存高18.9	二重口縁を呈す。赤色粒子、黄色粒子多量に含む、他に砂粒、黒色微粒子。7.5Y R ¹ / ₁ 橙。	口唇部ヨコナゲ、口縁部ヨコナゲの後部分的に縦ハケ後ヘラミガキ頸部から胴部入念なヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナゲの後斜めハケ後ヘラミガキ、中段からくびれ部へは入念。肩部指頭痕残る。以下荒いハケメと細かいハケメによる横、斜めハケ。	口縁部～胴部70%残存。
壺	2	口径 18.9 残存高 7.1	複合口縁を呈する。砂粒、赤色粒子を含む。2.5Y R ¹ / ₁ 橙。	口縁部木口状工具によるナゲの後ヘラミガキ、頸部縦ハケの後横ヘラミガキ、内面は斜め、横ハケの後ナゲ。	内外面、特に内面の剥落著しい口縁部20%残存
壺	3	底径 9.1 残存高12.6	あけ底。砂粒、赤色微粒子多量に含む、他に白色微粒子。2.5Y R ¹ / ₁ 明赤褐。	入念な縦ヘラミガキ、底部周辺は横ヘラミガキ、底面ケズリ。内面はナゲ。	外面底部、内面の剥落著しい。胴部下半～底部60%残存。
壺	4	底径 6.4 胴部最大径 19.0 残存高18.1	最大径を胴部中央にもつ。2～4mm赤色粒子、5mm大礫、砂粒を多量に含む。7.5Y R ¹ / ₁ 橙。	斜め、縦ヘラケズリの後入念なヘラミガキ、底面はケズリ。内面はナゲ。	内面剥落著しい口縁部欠胴部～底部60%残存。

(3) グリッド出土石器 (第36図)

1から14は石鏃である。以下、出土グリッド、石材、重さを明記する。

1、BG-53グリッド チャート製 2.43g 完形

2、BJ-46グリッド チャート製 1.33g 一部欠損

3、BJ-52グリッド チャート製 0.76g 一部欠損

4、表採、チャート製 0.64g 完形

5、BH-53グリッド チャート製 0.97g 完形

6、CC-60グリッド メノウ製 1.04g 一部欠損

7、2号住居跡覆土 メノウ製 0.95g 一部欠損

8、BF-43グリッド 黒曜石製 0.40g 一部欠損

9、BD-48グリッド メノウ製 1.31g 完形

10、表採 メノウ製 0.87g 一部欠損

11、BI-44グリッド メノウ製 0.86g 一部欠損

12、BC-51グリッド チャート製 0.84g 完形 いわゆる飛行機鏃である。

13、BH-55グリッド 黒曜石製 0.34g 完形

14、BI-50グリッド チャート製 0.18g 完形

15は、CD-49グリッド出土の打製石斧である。石材は砂岩、重さは95.06gである。表面に広く自然面を残している。

16は、CB-46グリッド出土の尖頭器である。チャート製、重さは1.21gである。表面右縁をわずかに欠損する。表裏全面に加工が施され、精巧なつくりである。

17は、BI-57グリッド出土の磨製石鏃である。石材は粘板岩のホルンフェルス、重さは0.92gであり、下端を欠損している。表裏とも平らに仕上げ、左右斜め方向に磨き上げている。

(4) 古銭 (37)

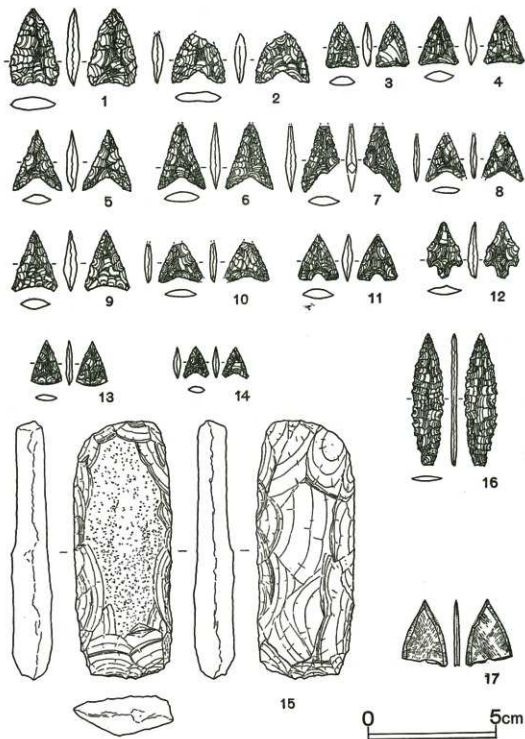
全てグリッド出土である。

1はBE-49出土、明道元宝(北宋、篆書体、1032年初鑄)である。

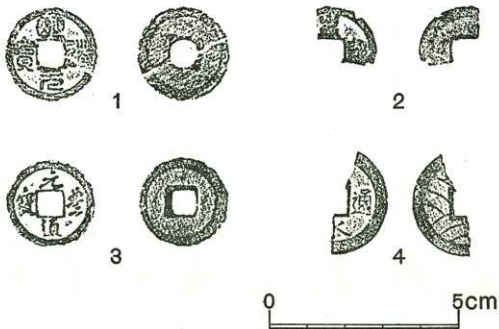
2はCC-51出土、皇宋通宝(北宋、隸書体、1039年初鑄)と思われる。

3はCE-45出土、元豊通宝(北宋、草書体、1078年初鑄)である。

4は表採、寛永通宝である。



第36図 グリフ出土石器



第37圖 古錢拓影圖

V 鶴ヶ丘 (E区) 出土遺物の X線回折分析および 電子顕微鏡観察

(株) 第四紀地質研究所 井 上 巖

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第11表胎土性状表を示すとおりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄、乾燥した後、メノウ乳体にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物資料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\%$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の固定は、X線回折分析法によった。

測定には理学電機製 X線回折装置を用い、X線管球、銅線陰極、フィルター、ニッケル、印加電圧一電流、30KV—15mA、スリット系、 $1^\circ-0.15\text{mm}-1^\circ$ の条件で行った。

走時速度は $2^\circ/\text{mm}$ フルスケールは800カウントとした。

なお、胎土の分析に先だて、原土と思われる碎屑粘性土の分析を行った。X線回折試験は原土、電気炉において 700°C 、 900°C で各々1時間燃焼した試料（同一試料を石英ガラスに定着し、原土、 700°C 、 900°C と順次実験を行う）の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析を行った。ただ、 900°C 以上になった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の割合についての観察は、電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製 T-20 を用い、倍率は $\times 35$ 、 350 、 700 、 1500 、 5000 の 5 段階で行い、写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土倍は粘土鉱物およびガラス生成状態を観察した。

2 実験結果の取り扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。

第1表右側には、X線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各

第11表 胎土性状表

試料 No.	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物 (mm)									ガラス量 (ml)	備 考		
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch Mi-Hb	Mo	Mi	Hb	Ch	Ka [Ha]	Au	Hy	Qt	Pl			Cr (Mu)	
T-1	B	V	⑩	⑤										66	12	微小	細粒、Qt, Pl, 粒径のそろったローム質粘土
2	A	V	⑩	⑤	4									39	11	〃	〃
3	B	V	⑩	⑤										48	9	〃	〃
4	A	Ⅲ~V	⑩	⑤	2			4						35	6	細粒	ローム質粘土
5	A	V	⑩	⑤	3					3				94	5	微小	〃
6	A	V	⑩	⑤	3									91	6	〃	砂質性ローム質粘土
7	A	V	⑩	⑤	2									96	15	〃	〃
8	B	V	⑩	⑤										88	9	〃	中粒、Qt, Pl, 〃
9	A	V	⑩	⑤	3									78	7	〃	〃
10	A	Ⅲ~V	⑩	⑤	2									46	5	細粒	ローム質粘土

焼成ランク：Mu...Ⅰ Mu-Cr...Ⅱ Cr-glass...Ⅲ Glass...Ⅳ 原土...Ⅴ

Mo—モンモロナイト、 Mi—雲母類、 Hb—角閃石、 Ch—緑泥石、 Ka—カオリナイト、 Ha—ハロイタイト、 Au—普通輝石、 Hy—葉輝石、
Qt—石英、 Pl—斜長石、 Cr—クリストバライト、 Mu—ムライト

組成分類： $\left(\begin{array}{l} \text{Mo-Mi-Hb} \\ \text{三角ダイアグラム} \end{array} \right) \left(\begin{array}{l} \text{Mo-Ch} \\ \text{Mi-Hb} \\ \text{要型ダイアグラム} \end{array} \right)$

第12表 分析試料一覽

試料No.	器種	部位	備考	試料No.	器種	部位	備考
T-1	高杯	脚部	裏面にハケメ明瞭	T-6	甕	肩部	表裏面にハケメ明瞭
2	〃	柱状部		7	壺	胴部	裏面にハケメ明瞭
3	〃	脚部		8	甕	〃	
4	〃	柱状部		9	壺	〃	
5	壺	胴部		10	〃	〃	

※分析資料はすべて第3号住居跡から出土した土器である。

胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)をmm単位で測定したものである。

ガラス量は $2\theta=10^{\circ}\sim 20^{\circ}$ の範囲にあって、チャートが全体に腫れあがるブロードな現象を示す部分に対する面積で表示し、ガラス比較の材料とした。

電子顕微鏡観察によって得られたガラス量と、X線回折試験におけるガラスとを比較対比し、さらにムライト(Mu)、クリストバーライト(Cr)、などの組成上の組み合わせによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

I) Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム

第38図に示す様に三角ダイヤグラムを①～③に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として④に含め、別に検討した。

三角ダイヤグラムは、モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、百分率(%)で表示する。

モンモリロナイトは $Mo/(Mo+Mi+Hb)\times 100$ で百分率として求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の①～④はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第38図に示すとおりである。

II) Mo-Ch、Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

第39図に示す様に菱形ダイヤグラムを①～④に分類し、位置分類を数字で記した。記載不能は⑤として別に検討した。

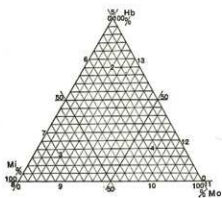
記載不能はモンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)、角閃石(Hb)のうち、③成分以上含まれない。④Mo、Ch 2成分が含まれない。⑤Mi、Hbの2成分が含まれない。の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMo-Ch、Mi-Hbの組み合わせを表示するものである。Mo-Ch、Mi-Hbの各々のX線回折試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎に百分率で表すもので、例えば、 $Mo/(Mo+Ch)\times 100$ と計算し、組み合わせ百分率を記載したものである。

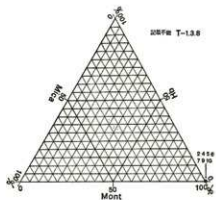
菱形ダイヤグラム内にある①～④はMo、Mi、Ch、Hbの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Ch、Hbのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。①-1と①-2は現在のところ大きな意味はないが、胎土分析の量が増えてくると位置類上の区分が必要なものとなるかもしれない。

しかし、現在は①として一括して取り扱った。

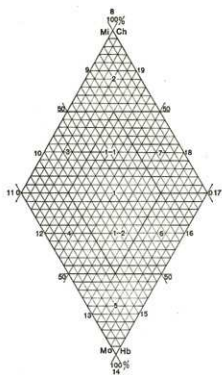
位置分類についての基本原則は第39図に示す通りである。



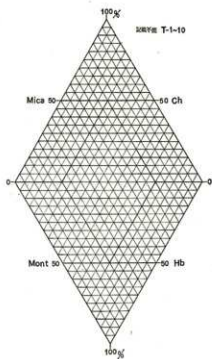
第38図 三角ダイアグラム位置図



第40図 Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム



第39図 菱形ダイアグラム位置図



第41図 Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mu) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライト (Cr) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- ㊸焼成ランクI…高温を示すムライトが多く生成し、ガラス単位面積が広い。
- ㊹焼成ランクII…ムライトとクリストバライトが共存し、単位ガラスの面積が狭くなる。
- ㊺焼成ランクIII…ガラスの中にクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面を成し、ガラスのつながりに欠ける。
- ㊻焼成ランクIV…ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小の葉状を呈する。
- ㊼焼成ランクV…原土に近い組織を有し、ガラスはほとんどできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組み合わせといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類による組み合わせによって行った。同じ組成をもった土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組み合わせのものは同じ文字を使用し表現した。

例えば三角ダイアグラムの㊸と菱形ダイアグラムの㊸-1の組み合わせはA、三角ダイアグラムの㊹と菱形ダイアグラムの㊹はB、という具合にである。

各文字の後の()内の数字は、三角、菱形ダイアグラムの位置分類の数字を合計したものである。近い組織を示しながら、位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には、試料数の多いものの類似としてA'などとダッシュをつけて分類した。

なお、タイプ分類のA、B、C等は便宜上であり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。

3 実験結果

3-1 タイプ分類

土器胎土は第11表胎土性状表に示すように第38図三角ダイヤグラム、第39図菱型ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA、Bの2タイプに分類される。

土器胎土中で多いタイプはAタイプで全10個のうち7個がこれに該当し、Bタイプは3個であるガラスは微小のものが多く、焼成ランクはⅤと低い。

Aタイプ…T-2、4、5、6、7、9、10

モンモリロナイト (Mont) 1成分を含み、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑沈石 (Ca) に欠ける。

T-4は位置分類上はAタイプに入るが緑泥石 (Ch) を含んでおり、Aタイプと若干組成が異り、ここではA'タイプとして取り扱った。

このA'タイプを除いても個体数は6個と多く、類似した環境で製作された土器と推察される。

Bタイプ…T-1、3、8

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の4成分に欠ける。

粘土は主に火山ガラスと $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$ によって構成されるものであろう。

全体に細粒の石英、斜長石を混入し、粒径が非常によくそろっている傾向にあり、水篩している可能性がうかがわれる。

モンモリロナイト (Mont) 系の粘土を利用しており、粘土の粘性を利用しているものと推察される。すなわち、土器焼成が高く、ガラスが多く生成する条件を有していればガラスによる土器の強度の強化をはかれるが、焼成温度が低い条件の中ではガラス生成による強度の強化は期待できない。この段階では粘土の有する粘性によって強度の強化をはかったものではなからうか。そのためモンモリロナイト系の粘土を利用しているものと推察される。

3-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は土器焼成温度、粘土の性質と密接なかわりがある。ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作ることは各々の集団のもつ個有の技術である。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異ってくるものであり、言換えれば各地における砂は各々個有の比率を有しているといえる。

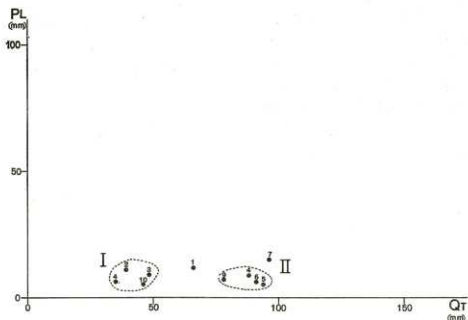
この個有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する個有の技術の一端である。

本遺跡より出土した土器胎土における石英と斜長石の相関図は第42図に示すとおりである。

第42図にはⅠ～Ⅲの2つのグループとこれらに属さないものが存在している。

Ⅰグループ…T-2、3、4、10

石英は35～50、斜長石は5～15の範囲にある。個体数は4個体で比較的中度が良い。



第42図 Q-T-P-L相関図

Iグループ…T-5、6、8、9

石英は75~95、斜長石は5~10の範囲にある。個体数は4個体である。T-9は本グループの中にあっては若干離れており、異なる可能性もある。

その他…T-1、7

IおよびIIグループとは離れており、個々にグループを代表している。

IおよびIIの2つのグループは各々別の集団によって製作された土器の可能性が高く、その他のT-1、7は各々が前記グループに属さず、個々にグループを代表している。

すなわち、これら2つのグループとその他が同一集団による時間の差を示しているのか、同時代における異なる集団を示しているのかは土器の型式、遺跡における土器の出土層準による時代の決定等の考古学上の判断との対比および検討が必要である。

ただ3-1の項で述べたように土器焼成温度が低い段階では粘土は粘性を有するモンリロナイト系であればある程度問題がなく、むしろ粘土に混入する砂の量が問題となったのではなかろうか。すなわち、ある程度の粘性を有する粘土を選択し、その中にある一定量の砂を混入することによって良質の土器を焼成したとすると砂は土器焼成上大きな意味をもってくると考えられる。砂は一種の緩衝材。すなわち、土器焼成過程における収縮条件の緩和材としての役割をはたしたのではないかと。

4 ま と め

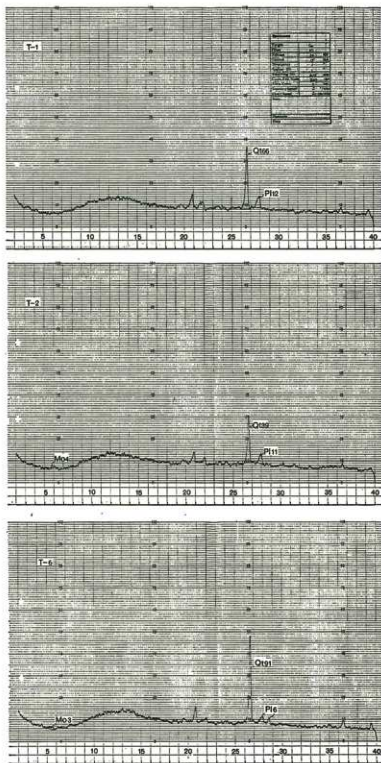
1) 土器胎土は粘土鉱物組成上A・Bの2タイプに分類される。Aタイプは個体数も6個と多

く、生産地を同じくする可能性が推察される。

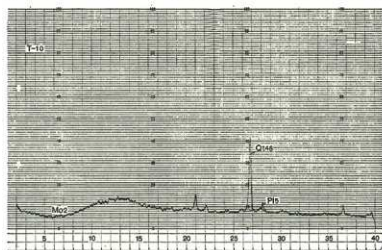
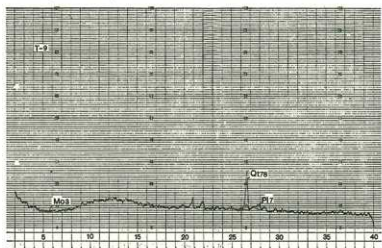
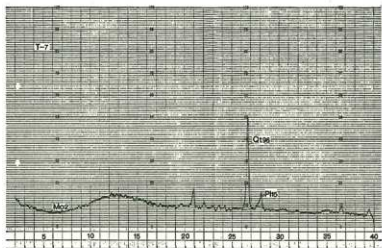
Ⅰ) 土器焼成温度は全体に低く、ガラスは微小で素地土の組織を残しており、焼成ランクはⅣと低い。

Ⅱ) 土器胎土はモンモリロナイト (Mont) 系の粘土であり、粘性を主体としており、土器焼成温度との関係において矛盾は少ない。

Ⅲ) 石英-斜長石の相関においてⅠ、Ⅱの2つのグループとその他に分類された。2つのグループが各々異なる集団を意味するとすれば土器のタイプとして2タイプ、その他の3個を加えると5タイプ存在すると推察される。



第43圖 X線回折分析 (T-1·2·6)



第44圖 X線回折分析 (T-7・9・10)

VI 結 語

1 先土器時代

鶴ヶ丘遺跡E区では、4ヶ所の集中区が検出された。通常、石器の出土する深度差は30~100cmと言われるが、本遺跡の場合は40~50cmほどであった。そしてそのほとんどが第1層、第2層に集中し、ごくわずかに第3層の上層からの出土があり、それ以下からはまったく石器が出土しなかった。このため、大半の石器は採集されたものと考えてよいと思う。

4ヶ所の集中区A~Dのうち、集中区Cと集中区Dは調査の進行上2つにわけたが同一集中区とも考えられる。また、集中区A~Dをその遺物内容からみると、2つに大別できるようである。1つは集中区B、1つは集中区A及びC・Dである。

集中区Bは、石器の石質に黒曜石がまったく存在せず、粘板岩、砂岩が主体を占める。製品は砂岩製局部磨製礫、凝灰岩製のすり石のみである。局部磨製礫は、静岡県寺谷遺跡（鈴木ほか 1980）、東京都鈴木遺跡（加藤ほか 1978）等に例がみられるが、本遺跡の例とは若干の相違がみられる。寺谷遺跡では局部磨製礫が2例検出され、大型の例は凝灰岩の偏平円礫を用い、表面下端に研磨面があり、裏面下端には剝離痕がある。また、研磨面と剝離痕との接する稜上に敲打痕はなく、上端に敲打痕及び敲打の際に生じた剝離痕がある。これに対して本遺跡出土の局部磨製礫は、表裏面下端に研磨面を有し、表裏両面からの研磨が施されており、表裏の研磨面の境には明瞭な稜をもつ。敲打痕及び剝離痕はまったく存在しない。寺谷遺跡の例では局部磨製礫をすり石または研磨面を刃部とみた一種の楔あるいは手斧石器とされているが、本遺跡出土の例も同様のことが考えられる。仮に、本遺跡出土の例の研磨面を刃部とみなした場合、問題となるのは寺谷遺跡の例にみられるような敲打痕及び剝離痕がまったくみられない点である。一方、すり石として考えるならば、研磨面は加工された面ではなく、使用の結果としての磨滅面となるであろう。しかし、すり石とする場合は、本例と隣接して出土した凝灰岩製のすり石との差異をすりつぶす対象物等も含めて考慮しなければならないのではないか。

また、集中区Bにおいては、他の集中区と比較して礫が多く存在する点も特徴の1つとしてあげられ、それらの礫の多くは、ススが付着していたり、赤化している。

集中区A及びC、Dは、石器の石質に黒曜石を使用するものが多く、特に集中区C、Dにおいては石器の90%以上が黒曜石である。製品は、ナイフ形石器4点、搔器2点、細剝離痕のある石器2点が出土している。ナイフ形石器には、チャート製、黒曜石製がそれぞれ2点ずつ出土している。下位を欠損する1点を除くと、すべて打面を残している。刃縁部は表面右側縁と左側縁の両方が存在するが、刃縁側の下半及び反対側縁に小規模な加工が施されている。特にチャート製の2点（第12図5、20）は、は、同一の石材であり、他に同一石材のものはなく、刃縁部が左右反対であるがきわめて酷似する点が多い。搔器は2点出土しており、いずれもラウンドスクレイパーである。上縁を除く周囲全縁に小規模な加工を施し、使用痕かと思われる細剝離が随所にみられる。このラウ

ンドスクレイバーの存在が本遺跡における集中区A及びC、Dの特徴の1つと思われる。

集中区Bに近いCB-60グリッドから出土している粘板岩製ナイフ形石器(第17図1)は、田中英司氏が設定された「砂川期」のナイフ形石器第2形態(田中 1979)に属するものと思われる。ここで田中英氏は、「砂川期」のナイフ形石器は素材と調整加工との対応関係によって、概形が柳葉形を呈することの多いものを第1形態とし、第2形態は、先端角が第1形態より大きく、両側縁が平行するものを中心としたものとしている。CB-60グリッド出土のナイフ形石器は、先端は欠損しているが、両側縁下半がほぼ平行している。仮に、このナイフ形石器を出土地点より集中区Bに含まれるとするならば、集中区Bを「砂川型式期」の石器群としてとらえることができるであろう。また、昭和49年度に調査された鶴ヶ丘遺跡C区においても「砂川期」のナイフ形石器の第1形態、第2形態が出土しており(田中 1984)、これらを含めて鶴ヶ丘遺跡の先土器時代の特徴の1つとなると思われる。

集中区Bと集中区A及びC、Dの時間的差は明確ではなく、石器類の出土標高においては、ほとんど差はない。しかし、集中区Bからはわずかであるが第Ⅲ層出土の石器が含まれており、他の集中区からはまったくないことを考えると、集中区Bが他の集中区より前出する可能性も考えられる。

引用・参考文献

- 鈴木忠司ほか 1980 「寺谷遺跡発掘調査報告書」 盤田市教育委員会
加藤有次ほか 1978 「鈴木遺跡Ⅰ」 鈴木遺跡刊行会
戸沢充則 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」 考古学集刊 第4号 第1号
砂川遺跡調査団編 1974 「埼玉県所沢市砂川先土器時代遺跡 第2次調査の記録」 所沢市教育委員会
谷井彪ほか 1975 「鶴ヶ丘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会
田中英司 1979 『武蔵野台地Ⅱb期前半の石器群と砂川期の設定について』 神奈川考古第7号
田中英司 1984 『砂川型式期の研究』 考古学雑誌第69巻 第4号

2 鶴ヶ丘稲荷神社古墳

鶴ヶ丘稲荷神社古墳は、鶴ヶ丘古墳群に属し、古墳の南西約200mには鶴ヶ丘1号墳が存在する。古墳は方墳の形態をとり、凝灰岩の切石を使用した羽子板状の横穴式石室を有する。石室の下には石室規模よりかなり大形な掘り方をもち、墳丘には断続的ではあるが方形に巡る石列がある。周堀は断続的で不整形ではあるが、南北辺がやや西に傾く長方形を呈している。規模は、墳丘の石列間で東西20.5m、南北21m、周堀内縁では東西40m、南北53mを測る。

凝灰岩の切石を使用した羽子板状の石室は、棺床面に平均こぶし大の河原石を敷きつめ、奥室中心には凝泥片岩を使用した棺座が置かれている。左右側壁の玄門、羨門及び奥壁中央部には切り込みがみられる。奥室と前室との境には凝泥片岩の柵石が設置されており、羨道部には人頭大の河原石を使用している。羽子板状の石室は、県内においては舞台遺跡1号墳（谷井ほか 1973）、根平平2号墳（水村、今井 1980）が知られる。舞台遺跡1号墳では玄門部に凝泥片岩を左右側壁に埋め込んで玄門幅をせばめており、羨道部を含む石室全体を凝灰岩の切石で構築している。また、奥壁、側壁の構築にも本古墳と若干の差がみられるようである。根平平2号墳では石室を凝灰岩の切石を使用し、羨道部には扁平河原石を用いている。羨道と玄室の境には両端に削り込みのある脊石が置かれている。本古墳にみられる棺座や柵石のような施設はないが、平面プランや側壁に切り込みがみられる点に類似性がたどれると思える。

石室下の掘り方は、石室規模よりかなり大きく掘られており、掘り始めのプラン（上場）と掘りあがりのプラン（下場）には東辺及び西辺においてその軸方位にずれがみられる。上場の東辺、西辺はほぼ南北を示しているが、下場ではやや西に傾き、石室の主軸方位とほぼ一致している。掘り方は、旧表土を掘り込み、底面はローム層中にまで達しており、その掘り方内に非常にいい版築をおこなっている。このような例は、鶴ヶ丘古墳群内の鶴ヶ丘1号墳（谷井、小久保ほか 1976）にみられる。鶴ヶ丘1号墳では、石室全体がおさまる程度の長方形に掘り込んだ土壌内に非常にいい版築をおこなわれている。鶴ヶ丘1号墳ではその技法を古代寺院建築の塔・金堂・講堂等の基礎築造法である掘り込み基礎技法としてとらえている。本古墳の場合も石室規模に対する掘り方の大きさの点に差はみられるが、鶴ヶ丘1号墳と同様のことが考えられるのではないかと。また、鶴ヶ丘1号墳の石室は、自然石乱石積み両袖型張りプランの横穴式石室であり、この点においては本古墳と大きな違いを示している。

墳丘の石列は、断続的ではあるがこぶし大の河原石を方形に巡らしている。やや平面的に検出されているが、他に石列がみられないことや、南辺の石列が石室前庭部石列へと続くことから、石列が墳丘端となる可能性も考えられる。

周堀は、北東部周辺は検出されていないが墳丘周辺を断続的に巡る。ただし、ここで周堀とした溝状の遺構には大きな問題点があり、またそのことが本古墳の重要な特徴の1つになると考えられる。問題点とは、周堀とした墳丘を断続的に巡る溝状の遺構が、はたして古墳の周堀としてとらえてよいものかという点である。古墳の石室からは年代を確定する遺物はまったくないが、その形態は明らかに終末期の形態をとっている。それにもかかわらず周堀の規模は非常に大きいのである。

また、溝状の遺構を周堀とし、仮に墳丘の石列を墳丘端とすると、その間には10~15mの平坦面あるいはきわめてなだらかな斜面が存在することとなる。という疑問が生じる。しかし、これらに対して周堀とする根拠もあり、それらは次に示すとおりである。

- 1、断続的ではあるが墳丘の周辺を方形（長方形）に巡っている。
- 2、東辺及び西辺の軸方位が石室の主軸方位とほぼ一致する。
- 3、東辺及び西辺の軸方位が石室下掘り方の下場の東辺及び西辺の軸方位とほぼ一致する。
- 4、周堀出土の土器類の年代が石室の形態の年代とほぼ一致する。
- 5、古墳周辺に溝状遺構を伴うと思われる他の遺構がない。

以上のような点を考慮して再度の検討が必要であろう。

鶴ヶ丘古墳群付近の方墳の出現は、東松山市周辺でも後期後半の古墳文化の特色としてとらえられ、方墳を中心とする古墳群は、前方後円墳あるいは大円墳を中心とする古墳群とは区別され、埴輪をまったく欠く古墳群で、7世紀中葉以後に出現してくるとされている（金井塚 1967）。鶴ヶ丘古墳群には少なくとも鶴ヶ丘稲荷神社古墳、鶴ヶ丘1号墳の2基の方墳が存在する。しかし、同じ方墳形態をとっていても石室の構造において大きな違いを示している。このことがどのような理由によるものかは言明し得ないが、鶴ヶ丘稲荷神社古墳の周堀の問題ともあわせて、今後さらに検討を必要とするであろう。

本古墳の年代に関しては、年代確定の遺物が乏しいため、詳しく言明することはできないが、石室形態や石室下の掘り方等を考えあわせれば7世紀代、強して限定するならば7世紀後半代となるのではないだろうか。

引用・参考文献

- 谷井彪 1973 「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会
- 水村孝行・今井宏 1980 「根平」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会
- 谷井彪・小久保徹ほか 1975 「鶴ヶ丘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会
- 金井塚良一 1967 『後期古墳研究の諸問題』 埼玉考古5
- 増田逸朗 1977 『北武蔵における横穴式石室の変遷』 信濃第29号第7号
- 甘粕健 1970 『古墳文化各説 関東』 新編考古学講座5
- 尾崎喜佐雄 1970 『古墳の終末』 新編考古学講座5
- 埼玉県 1982 「新編埼玉県史 資料編2」